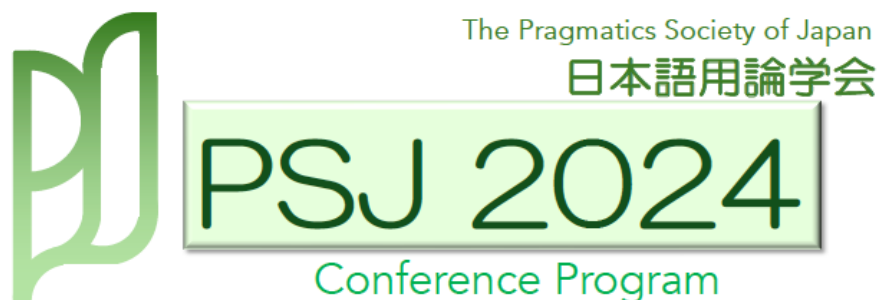




第 27 回（2024 年度）大会プログラム・発表要旨集

主催：日本語用論学会

日時：2024 年 11 月 30 日（土）／12 月 1 日（日）

会場：大阪大学 文法経講義棟

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8

アクセス <https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/infomations/access/>

※11 月 29 日（金）に若手研究者・大学院生向け
「前夜祭！研究成果をどうアピールするか」を開催

大会受付	文 12 講義室
会員総会・基調講演	文 41 大講義室
シンポジウム	文 41 大講義室
研究発表	文 41 大講義室、第 42 講義室、 第 22 講義室、文 11 講義室、 文 13 講義室
ポスター発表	リサーチコモンズ
書籍展示	4 階ホール
大会本部	演習室 H
参加者休憩室	第 23 講義室
語用論 ^{サロン} 茶寮	第 42 講義室
懇親会	豊中福利会館 4 階

今大会は、**事前参加申込を必須**としております。ご参加される方は、学会公式ウェブサイトをご覧いただき、早めにお申し込みくださいますようお願い申し上げます。また、大会期間中は、（一部を除いて）学内の食堂・コンビニエンスストアは営業しておりません。大学の近隣には食堂等はありません。**昼食は各自でご持参**くださいますようお願い申し上げます。

★ 本プログラム目次 ★

	大会テーマ・スケジュール・大会参加登録	p. 3
	大会会場案内・会場図	p. 4
	プログラム一覧表	p. 7
11 月 30 日	特別講義	p.11
	ワークショップ	p.12
	□頭発表1 (Room 1)	p.18
	□頭発表2 (Room 2)	p.18
	□頭発表3 (Room 3)	p.19
	□頭発表4 (Room 4)	p.19
	□頭発表5 (Room 5)	p.20
	ポスター発表	p.21
	会員総会	p.23
	大会発表賞表彰式	p.23
	基調講演	p.24
	懇親会	p.24
12 月 1 日	□頭発表1 (Room 1)	p.25
	□頭発表2 (Room 2)	p.26
	□頭発表3 (Room 3)	p.27
	□頭発表4 (Room 4)	p.28
	□頭発表5 (Room 5)	p.29
	会長就任講演	p.30
	語用論茶寮	p.30
	□頭発表6 (Room 1)	p.31
	□頭発表7 (Room 2)	p.31
	□頭発表8 (Room 3)	p.32
	□頭発表9 (Room 4)	p.33
	シンポジウム	p.34
	閉会式	p.35
両日共通	書籍展示	p.35

★大会テーマ★

「語用論、日本語学、逸脱」

★ 大会スケジュール（概要） ★

11月30日（土）

10:20～12:00：特別講義
10:20～12:00：ワークショップ1
10:20～12:00：ワークショップ2
10:20～12:00：ワークショップ3
10:20～12:00：ワークショップ4
13:00～13:35：□頭発表1（Room 1）
13:00～14:15：□頭発表2（Room 2）
13:00～14:15：□頭発表3（Room 3）
13:00～14:15：□頭発表4（Room 4）
13:00～14:15：□頭発表5（Room 5）
14:20～15:20：ポスター発表
15:30～15:50：会員総会
15:50～16:10：大会発表賞表彰式
16:15～17:45：基調講演
18:00～：懇親会

12月1日（日）

9:00～10:55：□頭発表1（Room 1）
9:00～10:55：□頭発表2（Room 2）
9:00～10:55：□頭発表3（Room 3）
9:00～10:15：□頭発表4（Room 4）
9:00～10:55：□頭発表5（Room 5）
11:10～12:00：会長就任講演
12:10～12:50：語用論茶寮
13:00～14:15：□頭発表6（Room 1）
13:00～14:15：□頭発表7（Room 2）
13:00～14:15：□頭発表8（Room 3）
13:00～14:15：□頭発表9（Room 4）
14:30～17:00：シンポジウム
17:00～17:10：閉会式

★ 大会参加登録・参加費 ★

事前登録のみ

日本語用論学会会員（一般・団体）：2,000 円	非会員一般：3,000 円
日本語用論学会会員（院生）：1,000 円	非会員院生：2,000 円
日本語用論学会会員（学部生）：無料	非会員学部生：無料

※会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」で登録。

※非会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「参加申込フォーム」にて登録。

※日本語用論学会会員は、今年度会費が納入済みでないと、事前登録ができません。

※事前登録を完了させるには、参加費の事前納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。

会場で参加費の支払いはできません。必ず事前に納入を済ませてください。

※事前登録の締切は **11月21日(木)** です。

会費・大会参加費免除について：

日本語用論学会では、激甚災害およびこれに準ずる災害で被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただいたくことにより、当該年度の「年会費」ならびに「年次大会参加費」を免除させていただきます。（すでに会費納入がお済みの場合、次年度の会費に充当することも可能です。）

【日本語用論学会事務局】

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

杏林大学外国語学部

八木橋宏勇研究室内

E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp

★ 大会会場案内・会場図 ★

〔交通について〕



- ★阪急宝塚線「石橋阪大前駅」より徒歩 15 分、または大阪モノレール「柴原阪大前駅」より徒歩 15 分。
- ★大阪空港よりタクシーで 10～15 分程度。

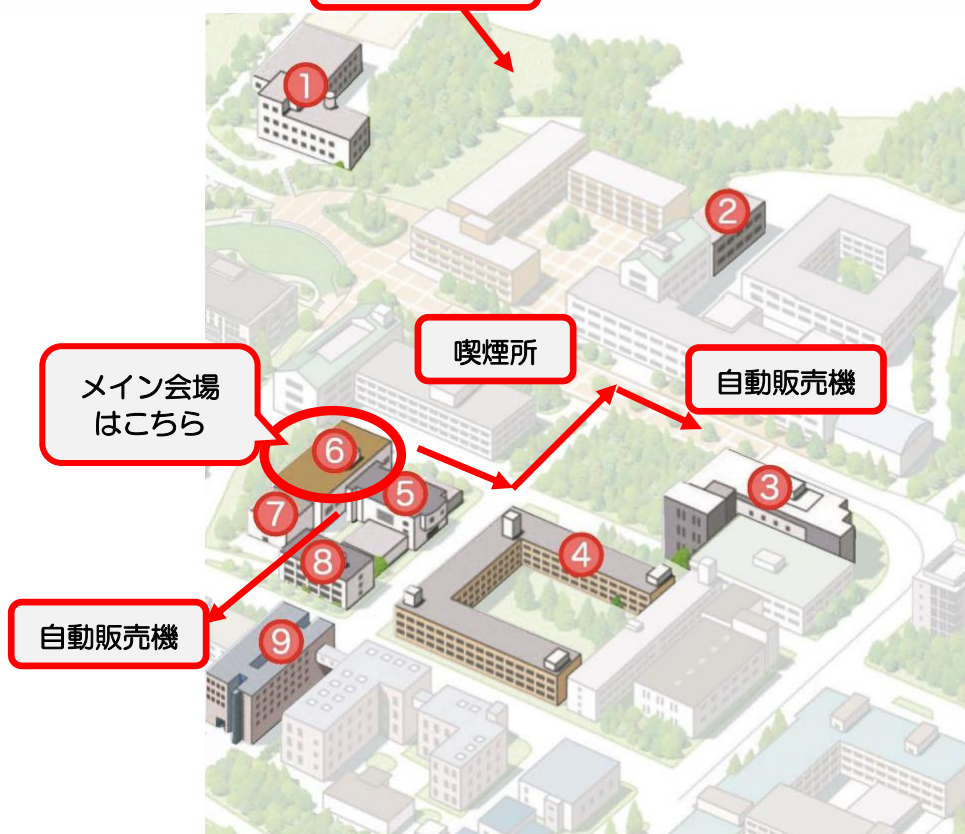
※会場への距離はどちらの駅も一緒ですが、阪急宝塚線「石橋阪大前駅」から来ると急坂があります。大阪モノレール「柴原阪大前駅」からはほぼ平坦な道です。

※タクシーで来る場合、「大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟前まで」と伝えると会場の目の前までタクシーが入構してくれます。

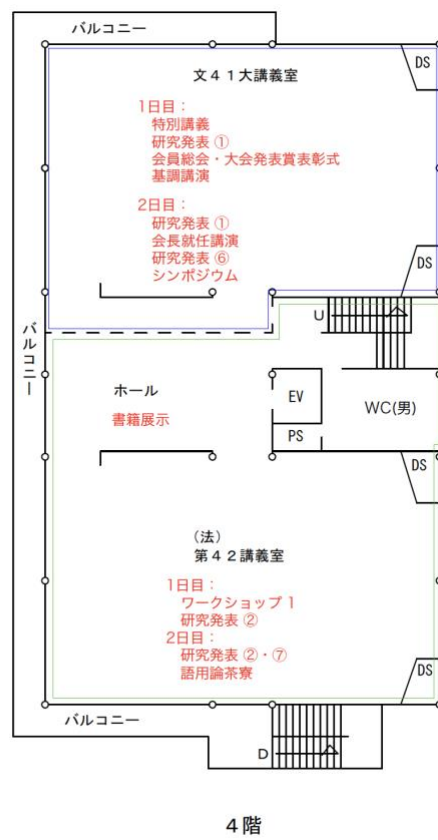
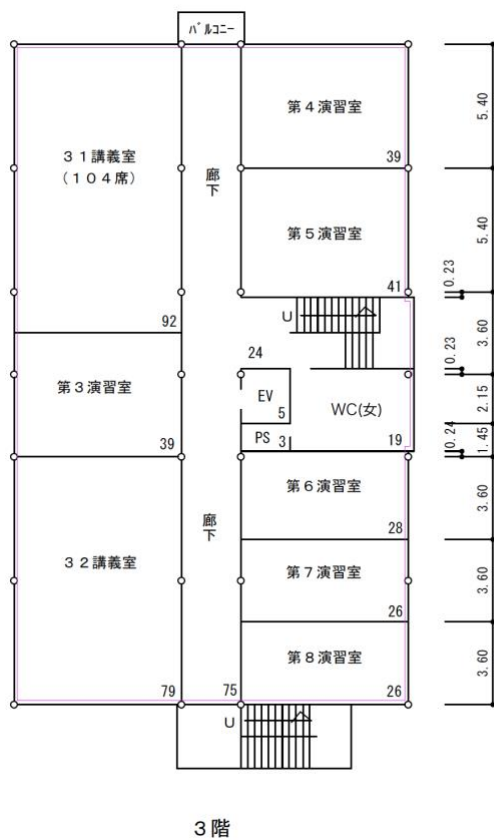
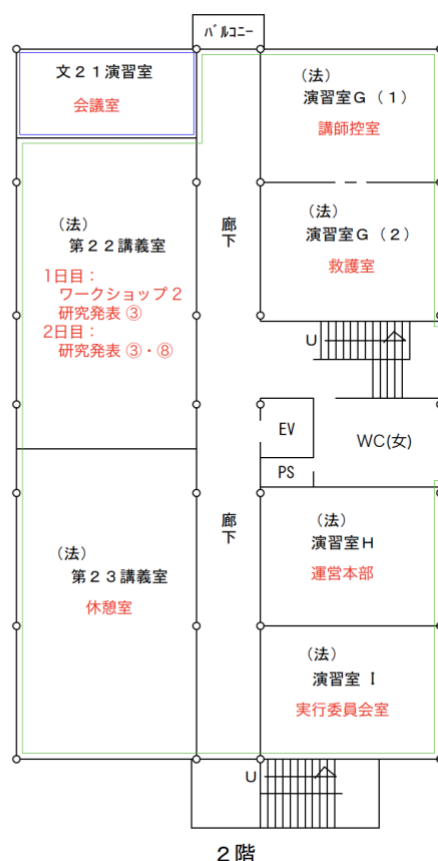
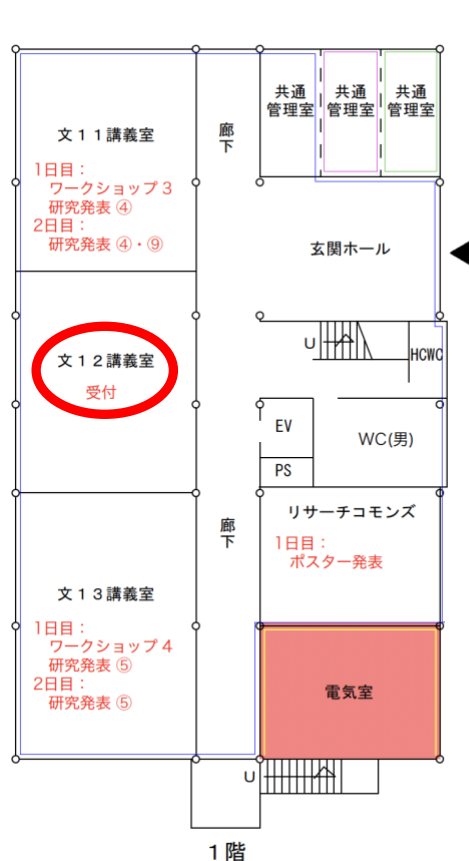
〔会場について〕

- 大会会場については、以下のキャンパス案内をご確認ください。会場は「文法経講義棟」です。隣に「法経講義棟」がありますのでお間違いないようにお願いします。
- 11 月 30 日、12 月 1 日は両日ともに（一部を除いて）食堂・コンビニエンスストアは営業していません。総合図書館下の通称「館下食堂」が、ランチタイムのみ営業しています。なお、大学の近隣に食堂はありません。**昼食は各自でご持参くださいますようお願い申し上げます。**
- 飲料の自動販売機は会場から徒歩 2、3 分程度のところに点在しています。キャンパスマップをご確認ください。
- 喫煙所（卒煙ブース）はキャンパス内に 1 箇所のみございます。キャンパスマップをご確認ください。ただし、林の中にあり、喫煙ブースの外で喫煙をして火事になったことがございますので、ご喫煙の際は必ずブースの中をお願いいたします。

〔豊中キャンパスマップ〕



〔教室・研究室配置図：文法経講義棟〕



日本語用論学会 第27回大会 プログラム（一覧表）

大会テーマ：「語用論、日本語学、逸脱」

開催日時：2024年11月30日（土）10:20 開始

2024年12月1日（日）9:00 開始

オンラインで参加される方へのアクセスリンクは、11月29日（金）までに、参加費の支払いと参加登録を完了された方に宛てて、メールでお届けする予定です。

【11月30日（土）】

	Room 1 [文 41]	Room 2 [第 42]	Room 3 [第 22]	Room 4 [文 11]	Room 5 [文 13]
	【特別講義 (Special Lecture)】 司会：小山 哲春 （大阪教育大学） 司会補佐： 小松原 哲太	【ワークショップ 1】 オーガナイザー： 名嶋 義直（琉球大学）	【ワークショップ 2】 オーガナイザー： 田中 廣明（京都工芸繊維大学[名]）	【ワークショップ 3】 オーガナイザー： 牧原 功（群馬大学）	【ワークショップ 4】 オーガナイザー： 花崎 美紀（法政大学）
10:20-12:00	Prof. Wei REN (Beihang University) The complexities and dynamics of pragmatics of sharing on social media <u><オンラインによる同時配信有></u>	批判的談話研究が可視化するもの 発表①周 氷竹（大阪大学[院]）新型コロナウイルス感染症宿泊療養者向けディスコースに関する批判的談話研究 発表②李 恒聡（大阪大学[院]）官製婚活の構造：医療化とジェンダー 発表③陳 凱歆（大阪大学[院]）日本の多文化共生施策が描く対象に関する批判的談話研究 発表④名嶋 義直（琉球大学）歴史的事実を示す談話の再文脈化：正統化と正当化	デフォルトからの逸脱—動词的語用論から 発表①長辻 幸（公立小松大学）連言文の推論特性と逸脱 発表②後藤 リサ（関西外国語大学）皮肉発話の逸脱性—「皮肉」と「嫌み」についての一考 発表③西田 光一（山口県立大学）対立の発話と逸脱 発表④田中 廣明（京都工芸繊維大学[名]）相手の理解が不十分なまま使われる指示表現—本当の逸脱か？	配慮表現におけるポライトネス機能を可視化する 発表①石渡 久和（群馬大学[院]）・牧原 功（群馬大学）禁止表現における強制力とインポライトネスについて 発表②劉 海燕（東北大学[院]）・甲田 直美（東北大学）交渉過程における話者間の均衡維持とポライトネス機能の可視化 発表③山岡 政紀（創価大学）日本語配慮表現の慣習化の程度測定と認定基準をめぐって 発表④小野 正樹（筑波大学）・朱 炫姝（目白大学）日本語学習者を対象とする日本語配慮表現の評価システムの開発	英語力と論理的思考力の相関性および言語ごとにみられる差異について：国内外で行ったアンケート調査の分析結果に基づく提言 発表①花崎 美紀（法政大学）・吉川 厚（関東学院大学）・花崎 一夫（東邦大学）英語力と論理的思考力の相関性および相対性：これまでのアンケートの分析結果とその課題 発表②八木橋 宏勇（杏林大学）・多々良直弘（桜美林大学）日英語の好まれる論理・表現を涵養するテンプレート・ライティング 発表③吉川 厚（関東学院大学）・菊地 聡（信州大学）・花崎 美紀（法政大学）・藤原 隆史（松本大学）異なる母語話者における英語学習の論理的思考への影響 発表④多々良 直弘（桜美林大学）・八木橋 宏勇（杏林大学）言語文化圏の相違に見る論理的思考・表現

12:00-13:00	昼休み Lunch Break				
	Room 1 [文 41]	Room 2 [第 42]	Room 3 [第 22]	Room 4 [文 11]	Room 5 [文 13]
	司会：牧原 功 (群馬大学) 司会補佐：ツオイ・エカテリーナ	司会：尾谷 昌則 (法政大学) 司会補佐：小松原 哲太	司会：松浦 光 (埼玉学園大学) 司会補佐：小松原 哲太	司会：大西 美穂 (名古屋短期大学) 司会補佐：平川 裕己	司会：名塩 征史 (広島大学) 司会補佐：平川 裕己
13:00-13:35	【総発表 1】 唐 彬 (北京航空航天大学) 中国人日本語学習者の依頼メールに関する語用論的能力の習得研究 ＜オンラインによる同時配信有＞	山崎 由佳 (京都大学[院])・ 西村 綾夏 (フリー) 引用としてのハッシュタグ：SNS からオフライン広告・広報物まで	轟 雨晨 (北海道大学[院]) 日本語における新型コロナウイルス感染症に関して用いられた概念メタファーの時系列分析	秋山 咲貴子 (九州大学[院]) 中国語の逆接接続詞“但是”と“可是”の継続的意味－共起語に着目して－	塩田 英子 (龍谷大学) 談話標識としての句読点：世代差構文とマルハラを例に
13:40-14:15		新山 聖也 (筑波大学[非])・ 落合 哉人 (国立国語研究所) YouTube Live におけるテキストチャットの引用：引用であることを示す方法に着目して	岸田 月穂 (大阪大学[院]) オンラインファンコミュニティにおける誹謗中傷－多人数インタビュー談話におけるスキーマの表明・交渉過程の分析－	木本 幸憲 (大阪大学) ダイクシスと共有知識、共同注意－アルタ語 (フィリピン) の指示詞の使い分けについて－	【総発表 2】 白田 泰如 (静岡理工科大学) 語りの進行を指向した順番交代：語りにおける受け手による順番取得
(5 分休憩)	ポスター発表 Poster Presentation 会場：リサーチcommons				
14:20-15:20	＜以下、入れ替えなし＞ 会場担当：ツオイ・エカテリーナ 1. 大政 美南 (東京学芸大学[院]＜横浜国立大学配置＞) 上級日本語学習者が持つ文末モダリティ表現「シヨウカ」の潜在的イメージ-TAE (Thinking at the Edge) を用いて－ 2. 児島 麦穂 (三重大学) インタビューにおける共通基盤化プロセス：調査者・被調査者間の関係性に関する一考察 3. 三浦 愛香 (立教大学)・並木一美 (立教大学) 日本人英語学習者の語用論的能力および相互行為能力の一端と教育的示唆：依頼と対話の流れに着目して 4. 重久 理奈 (大阪大学[院]) 現代歌壇の従属節におけるテンスの解釈とレジスター化：何がリアルな表現かを巡る「道行き文体」の発見を例に 5. 梁 勝奎 (名古屋大学[院]) 相互行為を中断させる発話と謝罪表現：「ちょっと待って」と謝罪表現を中心に 6. 都築 雅子 (中京大学) 不定用法 you の由来－第一言語習得からの考察 7. 河見 竜摩 (徳島大学[院]) SNS コミュニケーションにおけるアイロニー：Elon Musk の事例分析				
(10 分休憩)	会員総会・大会発表賞表彰式・基調講演 会場：文 41 大講義室 (Room 1)				
15:30-15:50	会員総会 General Meeting of Members				
15:50-16:10	大会発表賞表彰式 Best Presentation Award Ceremony				
16:15-17:45	基調講演 Plenary Lecture ＜オンラインによる同時配信有＞ 司会：秦 かおり (大阪大学)／司会補佐：白田 泰如 金水 敏 (放送大学大阪学習センター所長・大阪大学名誉教授) 翻訳話体と小説：村上春樹作品を例に				
18:00-	懇親会 Reception 会場：豊中福利会館 4 階				

【12月1日(日)】

	Room 1 [文 41]	Room 2 [第 42]	Room 3 [第 22]	Room 4 [文 11]	Room 5 [文 13]
	司会：西田 光一 (山口県立大学) 司会補佐：ツオイ・ エカテリーナ	司会：横森 大輔 (京都大学) 司会補佐：大江 元貴	司会：滝浦 真人 (放送大学) 司会補佐：大江 元貴	司会：澤田 治 (神戸大学) 司会補佐： 堀内 ふみ野	司会：椎名 美智 (法政大学) 司会補佐： 堀内 ふみ野
9:00- 9:35	森 貞 (福井工業高等 専門学校) 行為指示を意図した 条件文の後件に生起 する「ことになる」の語 用論的機能について	稲葉 卓 (大阪大学 [院]) 共有知識の有無に よるコミュニケーション調整：留学 経験者・留学未経験 者に対する留学経験 者の語りについての一考察	林 千賀 (城西国際 大学)・ 中井延美 (明海大学) 語用論研究を活か した外国人ホテル スタッフのための JSP 日本語教育 ー 断り談話の意味公 式を用いてー	Kotaro MAEDA (Kobe Gakuin University) The Lexicon- Encyclopedia Debate: A View from Anti-Lexicalism	福本 広光 (三重大学) TIME 誌における 分離不定詞の語用論 的意義
9:40- 10:15	白石 暖哉 (京都大学 [院]) 現代日本語における 文末表現「V ヨウ ニ」が表す「命令」 と「祈願」	野村 涼 (スタン フォード大学[院]) それお前の感想やな いかーい！ ー 非関西 方言話者の関西方言 を用いた「ツッコミ 的発話」の社会言語 学的分析ー	牟 玲 (名古屋大学 [院]) 中国人日本語学習者 の「断り」場面にお けるフィラーに関す る研究 ー 日本語母語 話者との比較を 通してー	Kanta TATENÔ (Osaka University [GS]) Hurford's Constraint and Japanese disjunctive ka and matawa	松山 加奈子 (奈良 女子大学[院]) 断り文句 not X or anything, but Y に おける or anything の機能
10:20- 10:55	大西 美穂 (名古屋 短期大学) 「匂いがする」型の 知覚表現と情報構造	長田 梨菜 (早稲田 大学[院]) 聞き手を明示する ことが持つ二者間の 会話の中での役割 ー 聞き手を呼称する 語を含む発話の語用 論的分析からー	中井 延美 (明海大学) 「大丈夫です」の 意味構造をめぐって		工藤 俊 (駒沢女子 大学) 若者ことば「ぴえ ん」の文末指向性
(15 分 休憩)	会長就任講演 会場：文 41 大講義室 (Room 1)				
11:10- 12:00	会長就任講演 President Lecture <オンラインによる同時配信有> 司会：吉田 悦子 (滋賀県立大学)／司会補佐：平川 裕己 秦 かおり (日本語用論学会会長・大阪大学) 語用論のコアとペリフェラル：語用論はどのように応用／援用されるのか				
12:00- 13:00	昼休み Lunch Break				
	語用論茶寮 会場：第 42 講義室 (Room 2)				
12:10- 12:50	語用論茶寮 Pragmatics Salon (Lunchtime Talk) 司会：堀内 ふみ野 研究会の作り方、育て方、楽しみ方 高田 博行・佐藤 恵 (以上、HiSoPra* (歴史社会言語学・歴史語用論) 研究会) 西村 綾夏・菊地 礼 (以上、デジタルコミュニケーション研究会)				

	Room 1 [文 41]	Room 2 [第 42]	Room 3 [第 22]	Room 4 [文 11]
	司会：澤田 淳 (青山学院大学) 司会補佐：平川 裕己	司会：工藤 俊 (駒沢女子大学) 司会補佐：白田 泰如	司会：遠藤 智子 (東京大学) 司会補佐：白田 泰如	司会：落合 哉人 (国立国語研究所) 司会補佐：大江 元貴
13:00- 13:35	富岡 侑央 (京都大学[院]) メトニミーにおけるソース とターゲットの照応可能性	【懇談発表 3】 松浦 光 (埼玉学園大学) 「ジェネリック」の新規的 用法—ヘッジ表現の観点 から—	堀田 智子 (宮城学院女子 大学) 語用論的観点からみた言語 景観 - 防災・減災のため の看板に着目して -	丁 昊天 (名古屋大学[院]) メタファー標識としての 括弧の使用傾向と修辭的 機能について
13:40- 14:15	黒川 尚彦 (大阪工業 大学)・武内 道子 (神奈川 大学[名]) オノマトペの世界：経験と 感覚運動的イメージ	水田 洋子 (国際基督教 大学) 対話における「論点のすり かえ」についての語用論的 考察	名塩 征史 (広島大学) 動感に基づく指導-学習を 巡る言語と身体—太極拳 教室における指導-学習過程 のマルチモーダル分析—	【懇談発表 4】 大江 元貴 (青山学院大学) 丸括弧書きの語用論・ 文体論
(15 分 休憩)	シンポジウム・閉会式 会場：文 41 大講義室 (Room 1)			
	シンポジウム Symposium <オンラインによる同時配信有> 司会：小松原 哲太 (神戸大学)			
14:30- 17:00	「言語コミュニケーションのなかの逸脱と創造性」 [第 1 発表] 野田 春美 (神戸学院大学) [第 2 発表] 泉 大輔 (立教大学) [第 3 発表] 天野 みどり (大妻女子大学) ----- 第 1 部：逸脱表現はなぜ生じ、どのように使われるのか？ 第 1 発表 野田 春美 歌詞における逸脱的表現の短縮志向 第 2 発表 泉 大輔 日本語の語構成における逸脱—「文の包摂」を対象に— 第 3 発表 天野 みどり 日本語構文の運用上における創造的逸脱—ノヲ文・ノガ文— 第 2 部：逸脱表現研究の言語学な意義は何か？ 第 1 発表 野田 春美 逸脱的表現における短縮志向の一般性 第 2 発表 泉 大輔 逸脱的な造語法から広がる言語研究 第 3 発表 天野 みどり 創造的逸脱文研究の可能性			
17:00- 17:10	閉会式 Closing Ceremony			

11 月 30 日 (土)

【特別講義 (Special Lecture)】(10:20~12:00)

<オンラインによる同時配信有>

会場：Room1 (文 41 大講義室)

司会：小山 哲春 (大阪教育大学) / 司会補佐：小松原 哲太

The complexities and dynamics of pragmatics of sharing on social media

REN, Wei (Beihang University, China)

Abstract:

Sharing has become an integral part of our daily lives and a fundamental component of digital cultures, influencing our communication, social interactions, and cultural production. My talk will delve into the intricate nuances and multifaceted nature of sharing practices on online forums and social media platforms, highlighting the complexity of online communication from a pragmatics perspective. Drawing on insights from a diverse range of relevant literature, I will explore the dynamics of sharing practices, examining how factors such as individual emotions, social norms, cultural contexts, and technological affordances intertwine to shape individuals' sharing practices. A particular focus of my presentation will be the pragmatic strategies employed by Chinese netizens when sharing their exam experiences and seeking or offering emotional support on social media groups.

Bio-statement:

REN, Wei is Professor of Applied Linguistics at the School of Foreign Languages, Beihang University, Beijing, China. His research interests include second language pragmatics and social media pragmatics. He has published over 90 papers in international journals, including *Applied Linguistics*, *Applied Linguistics Review*, *Discourse Context & Media*, *International Journal of Multilingualism*, *Journal of Pragmatics*, and *System* and over 30 papers in Chinese journals. His recent publications also include a book *Second Language Pragmatics* (Cambridge University Press), and special issues in *Journal of Pragmatics* and *Discourse Context & Media*. He serves as the associate editor of *Ampersand* (Elsevier) and editorial board members for multiple linguistics journals, including *Applied Pragmatics*, *Contrastive Pragmatics*, *Discourse Context & Media*, *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, *Journal of Pragmatics*, *Language Teaching Research*, and *System*.

【ワークショップ 1】 (10:20~12:00)

会場：Room2 (第 42 講義室)

●批判的談話研究が可視化するもの

オーガナイザー：名嶋 義直 (琉球大学)

本ワークショップでは4種類の談話、私権を制限するディスコース・国や自治体による少子化対策や外国人政策に関するディスコース・自衛隊や防衛相による歴史をめぐるディスコースを、種々の批判的談話研究の姿勢で分析し、私たちの社会が前提としている様々な価値観やイデオロギーを可視化する。それを通して批判的談話研究が可視化するものの広さと深さを共有し、批判的談話研究が談話の発話意図や意味を論じるという点において語用論研究に貢献できるだけではなく、権力の維持・強化・再生産・正当化といった実践に目を向けることによって批判的リテラシーの涵養に寄与できること、さらには人権意識の向上・多様な生き方を包摂できる社会の実現・多文化共生社会の実現・過去の歴史に対する誠意ある認識といった社会的課題への気づきを促し、「自分ごととして問題化し考える」市民を増やすことで課題解決や社会変革につなげていく潜在力を有することを論じる。

研究発表① 新型コロナウイルス感染症宿泊療養者向けディスコースに関する批判的談話研究

周 氷竹 (大阪大学[院])

発表者は2022年1月上旬に新型コロナウイルスオミクロン株の濃厚接触者として認定され、指定された日本国内の宿泊施設で待機することが求められた。本研究の分析対象は待機したホテルで渡された資料である。本研究の理論的背景は批判的談話研究である。研究目的と分析対象の特徴を踏まえ、ヴォダック(2010)の提唱するトポスを援用する。トポスは結論と(1つまたは複数の)論拠を結びつける「結論規則」である(2010:106)。療養者向けのディスコースでは、「危険と脅威」、「人道主義」、「負担、負荷」などのトポスが使われ、宿泊療養を正当化させ、繰り返し療養者本人への危険性や他の未感染者との差異に気づかせようとしており、記者会見とは対照的に、宿泊療養の当事者に向け、明示的かつ暗示的な脅迫と要請を行っていることがわかった。本研究を通じて、私権を制限するディスコースを批判的に読み解くいくつかの視点を提供したい。

参考文献：(1) ルート・ヴォダック. 2010. 「談話の歴史的アプローチ」、『批判的談話分析入門』ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー (編)、野呂香代子 (監訳)、93-131、東京：三元社。(2) Wodak, R. 2001. “The Discourse-Historical Approach” In Wodak, R. and Meyer, M. (eds), *Methods of Critical Discourse Studies Analysis* (1st edition), 63-94. London: Sage.

研究発表② 官製婚活の構造：医療化とジェンダー

李 恒聡 (大阪大学[院])

2013年3月、「少子化危機突破タスクフォース」が設置され、結婚と出産を促進するための対策が提案され、2015年の「少子化社会対策大綱」でも結婚支援への配慮が明文化されたが(斎藤, 2017)、このような「官製婚活」を批判的な視点から考察する研究はまだ少ない(斎藤, 2017;2018 など)。本研究では、「地域少子化対策重点推進交付金」の優良事例として紹介された「えひめ結婚支援センター」の活動や婚活セミナー、関連出版物を研究対象としフェミニスト批判的談話分析を援用して、「官製婚活」における結婚相談所の役割と女性の位置付け、について考察した。その結果、結婚相談所が医療機関化されていること、未婚状態が医療化されていること、保守的なジェンダー規範が迅速な成婚という目的のもとに(再)生産されることが明らかになった。本研究を通じて、「官製婚活」を解明し、多様な生き方を包摂できる社会の実現に貢献したい。

参考文献：斎藤正美. 2017. 「経済政策と連動する官制婚活」、本田由紀・伊藤公雄 (編著)『国家がなぜ家族に干渉するのか：法案・政策の背後にあるもの』. 87-120、東京：青弓社。

研究発表③ 日本の多文化共生施策が描く対象に関する批判的談話研究

陳 凱歆 (大阪大学[院])

日本における在留外国人は多様化している。総務省の「地域における多文化共生推進プラン (改訂)」(以下、推進プラン)では、「外国人住民」という言葉で地域に在住する外国人を一括りにしているが、

それはどういう外国人を指していて、日本人も施策の対象なのだろうか。本研究は、推進プランをデータに、施策の対象とその描き方、背後のイデオロギーを読み解いた。分析枠組みは Jager and Maier (2016) の装置分析である。その結果、施策の対象とされたのは「外国人住民」、「地域住民」、地方公共団体、NPO 等であること、「外国人住民」が最も多く提起され、主に言語支援が必要とするニューカマーを指していること、「外国人住民」の人権保護を曖昧に描いていること、「地域住民」と挙げながらも日本人住民を指している傾向があること等が明らかになった。外国人政策の一端を解明することを通して多文化共生の実現に貢献したい。

参考文献：(1) Jager, S. and Maier, F. 2016. “Analysing discourses and dispositives: a Foucauldian approach to theory and methodology” In Wodak, R. and Meyer, M. (eds.), *Methods of Critical Discourse Studies* (3rd edition), 109-136. London: Sage. (2) 総務省. 2020. 「地域における多文化共生推進プラン（改訂）」．参照 URL：https://www.soumu.go.jp/main_content/000718717.pdf. (閲覧日：2024 年 10 月 15 日)

研究発表④ 歴史的事実を示す談話の再文脈化：正統化と正当化

名嶋 義直 (琉球大学)

2024 年 6 月、沖縄戦司令官の辞世の句が陸上自衛隊第 15 旅団 HP に掲載されているという報道があった。沖縄からの削除要請に対し自衛隊や防衛相は「歴史的事実」を理由に今も削除していない。自衛隊 HP 上の辞世の句は他者により複数回再文脈化されたものである。純粋な歴史的資料と言えるのだろうか。そこで 6/3 から 6/6 までの初期報道で配信された全国紙と沖縄地方紙の新聞記事を分析し再文脈化の過程を可視化した。その結果、HP 掲載の辞世の句は第 15 旅団の前身であった組織の長が自分自身の訓示と恣意的に結びつけたものであること、当該長は「強い思い」で結びつけたとされるがその「強い思い」の内実が明らかにされていないこと、その「強い思い」が「沖縄の復興を願う強い思い」であるという解釈を誘発しかねない正当化が行われていることが明らかになった。歴史的資料を解釈する際には再文脈化とその意図という観点からの検討が重要である。

参考文献：Jager, S. and Maier, F. 2016. “Analysing discourses and dispositives: a Foucauldian approach to theory and methodology” In Wodak, R. and Meyer, M. (eds.), *Methods of Critical Discourse Studies* (3rd edition), 109-136. London: Sage.

【ワークショップ 2】 (10:20~12:00)

会場：Room3 (第 22 講義室)

●デフォルトからの逸脱—動的語用論から

オーガナイザー：田中 廣明 (京都工芸繊維大学[名])

本ワークショップでは、デフォルトの語彙、文、談話が、どのように逸脱し、動的な側面を持つのかに焦点を当てる(Jaszczolt 2005)。デフォルトとは「明らかに排反する事実のない限り、あることを結論する」とされ、アブダクションやヒューリスティック(heuristics) (不十分であいまいな情報でも、不確かな事態についての直感的なその蓋然性の予測) から、ある情報が欠如しても、その情報が既定値のように扱われるものをいう(児玉 2008)。デフォルトでは、個別的なトークンは、最も適合する知識として概念化されているタイプを探る(「最適原則(best-fit principle)」)。そこからの逸脱は、3 本足のイヌもイヌとされるように、事物が例外的情報を除いてそのモデルであるタイプのすべての特質をもつとみなされる(「特質継承の原則 (principle of inheritance)」) (Hudson 1990)。ただし、デフォルト(規範)と逸脱(例外)が対立すると、後者に焦点が当たる。ここでは、「連言文」「皮肉」「インポライテネス」「誤解」を例に挙げ、従来のデフォルトの議論からの拡大を目指す。

参考文献：(1) Hudson, R. 1990. *English Word Grammar*. Blackwell. (2) Jaszczolt, K.M. 2005. *Default Semantics*. OUP. (3) 児玉徳美 (2008) 「デフォルト解釈の見直し」『立命館文学』, 606, 1212-1225.

研究発表① 連言文の推論特性と逸脱

長辻 幸 (公立小松大学)

本発表は、英語の and 連言文に対応する日本語の節連言文について、その推論特性を動的に捉え、解釈

に生じる逸脱のメカニズムの解明を目的とする。日本語の節連言文では推論特性が構造により分岐しており、「～（し）て、～」の形式をとるテ形構造には関係的推論が、「～（する）し、～（する）」の形式をとるシ構造には独立的推論が関わる（Nagatsuji 2021）。しかし、このようなデフォルト的推論特性からの逸脱例が存在し、テ形構造では出来事間の時間的順序が逆行しているものが、シ構造では節間に「理由」の関係が読み込まれるものが観察される。本発表では、発話解釈プロセスの進行に伴う動的な側面に注目し、テ形構造とシ構造の逸脱現象を引き起こす文脈を同定するとともに、日本語の節連言文の解釈に生じる逸脱が異なる推論領域への侵入（intrusion）として生じ得ることを示す。

参考文献: (1) Ariel, M. 2012. “Relational and Independent and Conjunctions,” *Lingua* 122, 1692–1715. (2) Nagatsuji, M. 2021. *The Pragmatics of Clausal Conjunction*, Hituzi Syobo.

研究発表② 皮肉発話の逸脱性—「皮肉」と「嫌み」についての一考

後藤 リサ（関西外国語大学）

本発表ではアイロニー（および日本語の皮肉）であるということを明確に認知しづらい例を挙げ、発話解釈の視点からアイロニー標識の動的な性質を解明する。アイロニー発話の「乖離的態度」には段階性が見られ、アイロニーたらしめる標識が活性化するほど、より少ない労力で乖離性の程度の認知がなされるという（Yus 2016）。このアイロニー標識に「嫌み」（英語では sarcasm に相当）がある。日本語で「皮肉」と「嫌み」は本来区別し得るが（内田 2013）、一般の会話場面で厳密には区別し難い事例が散見される。本発表では、テレビドラマのセリフを題材に、文字通りか皮肉か、褒めか嫌みかがあいまいな発話に着目し、（字義内容からの）逸脱の程度を決定づける要因に迫る。この種のあいまいさの解釈における逸脱度の決定要因が多ければ多いほど、発話者の意図した逸脱度に接近し得るという予測の下、考察を進める。

参考文献: (1) 内田聖二 2013. 『ことばを読む、こころを読む』開拓社. (2) Yus, F. 2016. “Relevance theory and contextual sources-centred analysis of irony”, In Padilla Cruz, M. (ed.) *Relevance Theory: Recent Developments, Current Challenges and Future Directions*, 147-171, John Benjamins.

研究発表③ 対立の発話と逸脱

西田 光一（山口県立大学）

本発表は、Horn (1989)や Levinson (2000)が「対当の方形(Square of Opposition)」と呼ぶ概念の反対・矛盾関係をポライトネスとインポライトネスの発話の方略に応用し、この方略間の関係から逸脱した話し手にはマナー違反や失言の責任が問われ、社会的ペナルティが課されることを指摘する。ポライトネスの方略では Brown and Levinson (1987)の「合意せよ」をポジティブポライトネスの基本とし、「押しつけを最小限にせよ」をネガティブポライトネスの基本とする。対当の方形の配置により、ネガティブインポライトネスの方略はポジティブポライトネスに矛盾した「相違点を強調せよ」として、ヘイトスピーチのように対話の場にはいない人や集団を攻撃する話し方になり、ポジティブインポライトネスの方略はネガティブポライトネスに矛盾した「自分の価値観を一方的に押しつけよ」として、「バカ」や「クソ」などの価値の低いことばから相手を卑小化する話し方になることを示す。

参考文献: (1) Brown, P. and S. C. Levinson 1987. *Politeness*, CUP. (2) Horn, L. R. 1989. *A Natural History of Negation*. University of Chicago Press. (3) Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meanings*. MIT Press.

研究発表④ 相手の理解が不十分なまま使われる指示表現—本当の逸脱か？

田中 廣明（京都工芸繊維大学[名]）

本発表では、誤解を取り上げ、相手の理解が不十分なままの会話は、真の意味で「逸脱」となるのか、について考察する。相手の知識不足による誤解（会話の齟齬）は、話し手から見て聞き手が対象についての知識を知っているはずという（話し手の）過剰な見積もり、すなわち「話し手による聞き手への過剰な知識帰属(Speaker's attribution of too much knowledge to hearer)」から生じる(Horton 2008)。これに対し、通常の対話は、この「過剰な」が取られるデフォルト状態から出発する。しかし、誤解という、一見話し手の「自己中心的な(egocentric)」発話も、話し手は、誤解を引き起こす対象へ向かうまでに、彼（彼女）なりの理由、推論があると考えられる。本発表では、まず、その推論の部分をはっきりと示し、次に、誤解にまで至らない「(聞き手の) 理解発話」は、聞き手自身の修復、話し手からの説明を含む援助など、様々な方策が採られ、誤解の回避、ズレやひずみはそのままではいられない発話特質があることを考察する。

参考文献：Horton, W. S. 2008. “A memory-based approach to common ground and audience design,” In Kecskes, I. and J. Mey (eds.) *Intention, Common Ground and the Egocentric Speaker-Hearer*, 189-222, De Gruyter Mouton.

【ワークショップ 3】 (10:20~12:00)

会場：Room4 (文 11 講義室)

●配慮表現におけるポライトネス機能を可視化する

オーガナイザー：牧原 功 (群馬大学)

本ワークショップは、山岡 (2015) 等で定義されている日本語の配慮表現について、アンケート調査、コーパスなどのデータを用いて、定量的にその機能を示そうという試みである。コミュニケーションにおいて、様々な局面で求められるポライトネスには、ある程度の推測が可能なものが多く見られる。配慮表現はそのような推測可能性の高い場面で慣習化された表現であるとも言えるが、これまでは理論的な研究を主体に進められる傾向があった。本ワークショップは、配慮表現の機能を定量的に明示することは、言語研究のみならず、日本語教育など、関連する研究分野において、研究成果をより有用なものにすることになるのではないかとという着想にもとづいて企画された。困難な試みであるが、以下の 4 つの研究について、研究方法及びその結果を報告し、ワークショップの形で、様々な可能性を検討してみたい。

研究発表① 禁止表現における強制力とインポライトネスについて

石渡 久和 (群馬大学[院])・牧原 功 (群馬大学)

本研究は、日本語の禁止における強制力 (禁止度)、及びインポライトネス度 (失礼度) を言語運用者はどのように理解しているのか、日本語母語話者と日本語非母語話者に対して、それぞれ 100 人規模で実施したリッカートスケールを用いた印象評価の結果にもとづき報告する。非母語話者は自立した言語使用者である CEFRB2 (JLPTN2 相当) 以上を対象としたが、母語話者の語感と異なる部分が見られた。例えば、母語話者は「ここでは、撮影は禁止だよ」のような名詞述語を用いる形式では強制力は高いまま失礼度を下げているが、非母語話者にはこのような傾向はなかった。また、母語話者では、終助詞を用いる場合、「ここでは、撮影しないでよ」では終助詞を付与した形の方が失礼度が高く、「ここでは、撮影は禁止だよ」では終助詞のない方が失礼度が低かったが、非母語話者は、終助詞が付くと失礼度が低くなるという判断をする傾向が見られた。

参考文献：(1) 山岡政紀 (2015) 「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会 第 17 回大会発表論文集』315-318. (2) Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.

研究発表② 交渉過程における話者間の均衡維持とポライトネス機能の可視化

劉 海燕 (東北大学[院])・甲田 直美 (東北大学)

本研究は、値下げ交渉場面会話の音声および文字化資料をもとに、発話を形態素解析し、売り手と買い手が用いた語の特徴量を交渉の推移ごとに可視化する。交渉場面では即座に決定が下されるのではなく、交渉は逡巡しながら購買決定までの山場を繰り返す。全体構造の中で、売り手と買い手はどのように自己の立場を際立たせ、あるいは緩和しているだろうか。交渉の成否における特徴語の使用差を視覚的に探索し、話者間の均衡維持のパターンを示す。交渉場面におけるかけひきでは、自身の主張をどの場面ですべて提示するかが重要となる。自身の立場とは、たとえば、売り手による商品の推奨、買い手による購買意欲の表明 (予算に見合わないので購入を控える、あるいは逆に購入の意思の表明) などである。交渉場面における主張の提示は自他の領域の侵害と関わるが、従来の研究のようにフェイスの侵害度を発話ごとに考えるのではなく、交渉過程のなかで提示する。

研究発表③ 日本語配慮表現の慣習化の程度測定と認定基準をめぐって

山岡 政紀 (創価大学)

配慮表現の定義は「(前略) 相手との対人関係になるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」とされている (山岡 2015)。語用論的現象に遍く見られる慣習化

はすべて程度の連続性を有しており、慣習化の成否を隔てる境界線は存在しない (Leech 1983)。しかし、配慮表現辞典への登載や日本語教育での導入などの実利的目的から配慮表現の認定基準を人為的に決定する必要がある。連語の配慮表現の場合、中心語彙の占有率が一つの指標となる。例えば、BCCWJにおいて「～のも何ですが」(異形態含む) 122 件のうち上接動詞「言う」が 92 件 (75.4%) を占め、さらにそのうち「自分で」の上接例が 57 件 (62%) ある。これらの高い占有率は連語「自分で言うのも何ですが」の固着度の高さを表している。本発表ではこれらの数値をもとに配慮表現の慣習化率の暫定基準を 50%とすることを提案する。

参考文献：(1) 山岡政紀 (2015)「慣習化されたポライトネスとしての配慮表現の定義」『日本語用論学会 第 17 回大会発表論文集』315-318. (2) Leech, G (1983) *Principles of Pragmatics*, London: Longman.

研究発表④ 日本語学習者を対象とする日本語配慮表現の評価システムの開発

小野 正樹 (筑波大学)・朱 炫姝 (目白大学)

Brown and Levinson(1987)で示された「フェイス侵害度見積もりの公式」では、類型的言語対照を目標として、評価計算式が提案されている。山岡 (2015) では、「慣習化」を鍵概念として、日本語の特徴を記述する日本語配慮表現研究を進めている。こうした抽象的なアプローチを踏まえた日本語学習者への評価システムの開発を提案する。ポジティブポライトネスを示す「ごめん、これお願い」と、ネガティブポライトネスを示す「大変申し訳ないのですが、本件についてお考えいただくことができますでしょうか」では、同じ依頼表現でも語彙、文型、実際の発話場面が異なる。本発表では、数値化を試みた先行研究を概観した上で、ある発話機能のタスクの難易度、語彙の難易度、文型の頻度他を基にした計算式を提案する。本計算式に基づき、日本語母語話者と学習者の相違を数値的に示すと同時に、発話場面に応じた配慮表現の慣習化を議論する。

参考文献：(1) Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press. (2) 鍋島弘治朗, 廣瀬幸生, 佐藤和之, 小野正樹 (2016)「日本語学会 2016 年度春季大会シンポジウム報告日本語らしさとわかりやすい日本語」『日本語の研究』204-210.

【ワークショップ 4】 (10:20~12:00)

会場：Room5 (文 13 講義室)

●英語力と論理的思考力の相関性および言語ごとにみられる差異について： 国内外で行った アンケート調査の分析結果に基づく提言

オーガナイザー：花崎 美紀 (法政大学)

本 WS メンバーは、2013 年から、日本英語検定協会や日本生涯学習総合研究所と共同で、中学生から大学生を対象に英語力・論理的思考力・批判的態度の各テストを行い、その結果を分析してきた。2023 年度からは、他言語を母語とする学生を対象に同様のテストを実施し、言語ごとの相違点についても検討してきた。

その結果を基に、本 WS は 3 部構成で行う。第 1 部では、国内のアンケート分析を示す。第 2 部では、二つの研究データを分析する。まず、日本語と英語の論理的構造の違いを検証し、次に日本語以外を母語とする人における英語力と論理的思考力の相関性について検討する。第 3 部では、渡邊(2023)で提案されているような論理的思考の文化的基盤について考察し、第 1 部と第 2 部の議論を踏まえて、論理的思考力を伸ばすための具体策を探る。この WS を通じて、英語力と論理的思考力の関係を深く理解する機会を提供したいと考えている。

研究発表① 英語力と論理的思考力の相関性および相対性：これまでのアンケートの分析結果とその課題

花崎 美紀 (法政大学)・吉川 厚 (関東学院大学)・花崎 一夫 (東邦大学)

本発表では、2013 年度から実施してきた、英語の語彙や文法力を測定した英語力テストと、論理的思考力テスト、および批判的態度テストの分析を基に、英語力と論理的思考力の相関性について論じ、研究で浮かび上がった課題について考察したい。

具体的には、Bloom's Taxonomy に基づく論理的思考態度の4項目（分析力、評価力、推論力、表現力）のうち、分析力、評価力、表現力、とりわけ後者2つが高い学生は、英語力が高い傾向があることがわかった。2023年度からは、母語が日本語以外の学生にも同様の調査を行い、同じ傾向がみられるか検証した。この過程で1) 日本語の論理性と英語の論理性は同じか、2) 日本語以外の言語にも各言語に特有の論理性が存在するか、の2つの課題が浮上した。

本研究発表では、これまでの研究分析結果の報告をするとともに、対象言語を拡大してきた中での問題点について議論を行い、次の議論につなげたい。

参考文献：Bloom, B. S., M. D. Engelhart, E. J. Furst, W. H. Hill, and D. R. Krathwohl, "Taxonomy of Educational Objectives: The Classification of Educational Goals". *Handbook I: Cognitive Domain*, New York: David McKay Company, 1956.

研究発表② 日英語の好まれる論理・表現を涵養するテンプレート・ライティング

八木橋 宏勇 (杏林大学)・多々良 直弘 (桜美林大学)

英語学習者のライティング答案を見ると「日本語が透けて見える」と感じることもある。センテンスレベルでは適格な英文を書くことができたとしても、まとまった分量の英文を紡ぐ場合には、やはり「日本語が透けて見える」ことが多い(八木橋 2021)。本発表では、その度合いは「好まれる談話展開パターン」および「言及することが期待される／されない情報」への習熟度と相関関係があることを指摘し、テンプレート(菅井 2015)を活用したトレーニングの有用性も検証する。

参考文献：(1) 菅井三実 (2015)『人はことばをどう学ぶか』くろしお出版 (2) 八木橋宏勇 (2021)「用法基盤モデルに基づく英語ライティング教育 期待される情報と好まれる談話展開の涵養に向けて」児玉一宏・小山哲春(編)『認知言語学の最前線』ひつじ書房 (3) 八木橋宏勇・多々良直弘他 (2024)『英語の思考と型を身に付けるテンプレート・ライティング』金星堂

研究発表③ 異なる母語話者における英語学習の論理的思考への影響

吉川 厚 (関東学院大学)・菊地 聡 (信州大学)・花崎 美紀 (法政大学)・藤原 隆史 (松本大学)

本発表では、日本語以外の母語を持つ英語学習者と、論理的思考との関係性を報告する。主に使用している言語、出身国、年齢、教育等の属性に基づき論理的思考の関連性を調べ、どの属性が論理的思考の総体と、あるいは研究発表1で示した Bloom's Taxonomy に基づく論理的思考態度の4項目と関係があるのかを報告する。母語の言語により論理的思考が強く促進されるか否かがあるのか等のデータを用意したり、言語習得における論理的思考力の向上メカニズムについてデータから分かる仮説を構築したりし、議論につなげたい。

研究発表④ 言語文化圏の相違に見る論理的思考・表現

多々良 直弘 (桜美林大学)・八木橋 宏勇 (杏林大学)

本発表は、フロアとのディスカッションに向け「論理的思考・表現の文化差」に関する問題提起を行う。本プロジェクトが実施した「英語による論理的思考力テスト」(2013年3月～2016年1月)において、英語力と論理的思考力には有意な相関があることが確認されている。論理的思考力の下位領域として「分析」「評価」「推論」「表現」という4つの領域を設定し分析した結果、論理的思考力と言語能力の双方に関連するのは「評価」「表現」であることも分かっている。本発表では、「表現」という領域に焦点を当て、渡邊(2023)が提示する議論(アメリカ・フランス・イラン・日本という言語文化圏によって異なる思考表現スタイル)を援用することで、<研究発表2><研究発表3>で採り上げたデータを過不足なく明快に分析できるかどうか検証する。

参考文献：渡邊雅子(2023)『「論理的思考」の文化的基盤 4つの思考表現スタイル』岩波書店

□頭発表 (13:00~13:35)

会場：Room1 (文 41 大講義室)

1-①司会：牧原 功 (群馬大学)

司会補佐：ツオイ・エカテリーナ

1-①13:00~13:35【懇議発表 1】<オンラインによる同時配信有>

中国人日本語学習者の依頼メールに関する語用論的能力の習得研究

唐 彬 (北京航空航天大学)

本研究の目的は、中国人日本語学習者の依頼メールに関する語用論的能力を明らかにすることである。異なる社会的負担度を伴う依頼メールタスクにおいて、異なる習熟度の学習者が使用する依頼ストラテジー、外的修正および内部修正にどのような違いが見られるか、また日本語母語話者との違いについても、量的分析と質的分析を組み合わせ考察する。これにより、学習者がメールを書く際の習得傾向、頻繁に使用するストラテジー、メール構造における欠点、言葉遣いに関する問題点を明らかにする。最終的には、日本語ライティング教育、語用論的指導、及びコミュニケーション教育に貢献することを目指す。

参考文献：(1) Taguchi, N. 2014. Development of interactional competence in Japanese as a second language: use of incomplete sentences as interactional resources. *Mod. Lang. J.* 98, 518-535. (2) Yuqing, Sun. 2023. Analysis of external modification devices and framing moves in request emails: The case of Chinese learners of Japanese. *Applied Pragmatics* 6, 86-114.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room2 (第 42 講義室)

2-①②司会：尾谷 昌則 (法政大学)

司会補佐：小松原 哲太

2-①13:00~13:35

引用としてのハッシュタグ：SNS からオフライン広告・広報物まで

山崎 由佳 (京都大学[院])・西村 綾夏 (フリー)

文字列の前に「#」を付加した表現である「ハッシュタグ」は SNS で誕生し、ハイパーリンクの機能を伴って広まった。しかし今日ではハッシュタグはオフラインの広告・広報物にも用いられており、そこにはハイパーリンクがなくとも発生する効果が想定される。本発表は、当該表現が「引用」の可能性を意識させる合図として機能することを主張し、引用の観点からオフライン事例の語用論的效果を分析する。具体的には、既出表現の反復の可能性を示唆する効果、当該表現の話者が広告・広報物の発信者から分離する効果等を指摘し、安心感の形成や共同主観性の演出に寄与する道筋を示す。また、オンラインでの当該表現は原理的にただの文字の列としての使用も可能だが、収集されたオフライン事例では意味内容を持つ言語表現として解釈されることを述べる。さらにオンラインからの表現の越境という点で、SNS の投稿群の構造を模すような事例の存在に言及する。

参考文献：(1) Caleffi, P. M. 2015. “The ‘Hashtag’: a New Word or a New Rule?” *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 12(2), 46-69. (2) Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Oxford: Blackwell.

2-②13:40~14:15

YouTube Live におけるテキストチャットの引用：引用であることを示す方法に着目して

新山 聖也 (筑波大学[非])・落合 哉人 (国立国語研究所)

引用表現には、引用標識等を用いて引用であることを示す文法的な引用表現のほかに、引用標識や発言動詞を伴わないゼロ型引用表現 (大久保 2013) が存在する。大久保 (2013) は政治家の演説の事例を取り上げているが、YouTube Live でも、音声によって話す配信者が、引用標識等を伴わずに視聴者のテキストチャット (コメント) を引用し、そのコメントに言及することがある (落合・新山 2024)。本発表では、政治家の演説と YouTube Live の事例を比較し、いずれもプロソディによって引用であることが示唆される場合があるほか、YouTube Live におけるコメントの引用は、引用部分と言及部分がインタラクションを構成していることで、引用部分が引用されたものであることが語用論的に示される点で特徴的であることを指摘する。

参考文献：(1) 大久保加奈子. 2013. 「共有される他者のことば—選挙演説に用いられるゼロ型引用表現の分析—」『社会言語科学』16(1), 127-138. (2) 落合哉人・新山聖也. 2024. 「YouTube Live における「雑談配信」の談話分析—声で話す VTuber と文字で話す視聴者とのやりとりに着目して—」『社会言語科学会第 48 回大会発表論文集』19-22.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room3 (第 22 講義室)

3—①②司会：松浦 光 (埼玉学園大学)

司会補佐：小松原 哲太

3—①13:00~13:35

日本語における新型コロナウイルス感染症に関して用いられた概念メタファーの時系列分析

轟 雨晨 (北海道大学[院])

本発表の主眼は、新型コロナウイルス感染症に関して用いられた概念メタファーの使用状況と、その時系列的な変化を明らかにするところにある。具体的には、2020 年から 2022 年にかけての NHK の報道記事をコーパスとし、「戦争メタファー」、「自然メタファー」、「旅メタファー」、「資源メタファー」の 4 つのメタファーの使用頻度と変化を分析した。特に、報道件数は時間とともに増加している一方で、メタファーの全体的な使用は減少傾向にあることを示した。また、戦争メタファーが初期段階で多用された一方、時間が経つにつれて自然メタファーや資源メタファーが増加していることも確認された。これにより、メタファー使用が感染症に対する公衆の感情や社会的認識の変化と密接に関連していることが明らかとなった。

参考文献：(1) Charteris-Black, Jonathan. 2022. *Metaphors of Coronavirus: Invisible Enemy or Zombie Apocalypse*. University of the West of England. (2) Lakoff, George and Johnson, Mark. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

3—②13:40~14:15

オンラインファンコミュニティにおける誹謗中傷—多人数インタビュー談話におけるスキーマの表明・交渉過程の分析—

岸田 月穂 (大阪大学[院])

本発表の主眼は、ファン同士の多人数インタビュー談話を「スキーマ」(Tannen and Wallat, 2014) の観点から分析し、オンラインファンコミュニティにおける誹謗中傷の様相を考察する点にある。具体的には、オンラインファンコミュニティにおける誹謗中傷に関するスキーマは、会話の参加者であるファンたちが所属しているコミュニティの知識と彼女らが日常生活を営んでいる社会における規範や常識に基づいて表明、交渉されていることを明らかにする。

参考文献：Tannen, D.F. and Wallat, C. 2014. “Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination/Interview”. In Jaworski, A. and Coupland, N. (eds.) *The discourse reader (3rd edition)*, 312-328. London and New York: Routledge.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room4 (文 11 講義室)

4—①②司会：大西 美穂 (名古屋短期大学)

司会補佐：平川 裕己

4—①13:00~13:35

中国語の逆接接続詞“但是”と“可是”の接続的意味-共起語に着目して-

秋山 咲貴子 (九州大学[院])

中国語の逆接接続詞“但是”と“可是”の意味の違いについて、中国語の辞書 (呂 1999) で両者は同義語として扱われるほどその意味の違いは微妙であると考えられてきた。先行研究においても、意味の強調の度合いや使用される場面の相違点が説明されるばかりで、意味の本質的な違いについては明らかにされていない。

本発表では、関連性理論の手続き的制約の枠組みを基に「BCC コーパス」のデータを使い二つの接続詞の意味の違いを明らかにする。分析結果によれば、“但是”は先行発話と後続発話の矛盾と先行発話の削除という直接的な否認を意味するのに対して、“可是”は“但是”と同じく矛盾と削除の手続きを符号化しているが、削除されるのは先行発話の高次表意（例えば、期待などの想定）であるように考えられる。これは、“可是”が想定に反するような意味を伝達する副詞と共起しやすいことから示唆される。

参考文献：(1) 呂叔湘 (1999) 《現代汉语八百詞》商務印書館。(2) Sperber, D. and Wilson, D. (1986/1995) *Relevance Theory: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

4—②13:40～14:15

ダイクシスと共有知識、共同注意 —アルタ語（フィリピン）の指示詞の使い分けについて—

木本 幸憲（大阪大学）

指示詞の形式的区別を説明する際、近年、発話時における共同注意の状態など、言語使用に即した語用論的な説明が試みられるようになってきている(Dissel 2006, Levinson et al. 2018)。本研究は、フィリピンで話されているアルタ語においても、距離による説明だけでは不完全であり、共同注意と話し手と聞き手の共有知識が指示詞の選択を説明する上で重要であることを論じる。本発表では特に、遠くのことを指すときであっても、遠称が用いられるとは限らず、近称や中称が用いられること、また体験的または知識の上で既知の対象や馴染みのものである場合は近称や中称が使われやすいこと、最後に、一度指示行為が達成され、共同注意が確立された後話し手が考える場合には、近称や中称が使われやすいことを述べる。

参考文献：(1) Diessel, H. 2006. Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar *Cognitive Linguistics* 17(4), pp.463–489. (2) Levinson, S. C., S. Cutfield, M. J. Dunn, N. J. Enfield, and S. Meira (eds.) 2018. *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.

□頭発表 (13:00～14:15)

会場：Room5 (文 13 講義室)

5—①②司会：名塩 征史（広島大学）

司会補佐：平川 裕己

5—①13:00～13:35

談話標識としての句読点：世代差構文とマルハラを例に

塩田 英子（龍谷大学）

本発表では世代差構文、中でも「マルハラ」について語用論的観点から考察する。マルハラとは「LINE やチャットの文章で文末の『。』に若者が威圧感を覚えるという『マルハラスメント』」（鳥海 2024）のことであり、世代差構文の一種「おじさん構文」の特徴であるとされている。このような、打ちことばにおける句点の使用が若年層に不快感を与えることは、句点を談話標識（discourse marker, 以降 DM）として位置付けることで説明可能となる。たとえば DM の特徴である随意性や談話終結機能に注目すると、句点が必須の要素でない（随意性）のに文末に付加され、一方的に打ち切る目印となる（談話終結機能）といった側面が説明できる。さらに DM の観点からマルハラを考察することで、句点と読点の違い、話しことばと打ちことばの違いに対する新たな視点が得られる可能性もある。

参考文献：(1) 廣瀬浩三・松尾文子・西川眞由美. 2022. 『英語談話標識の姿』東京：ひつじ書房。(2) 鳥海 不二夫. 2024. 「マルハラはいつどこで生まれたのか？」<<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/be7b1fe1118121ed824f952b2c32705f32a399a0>>. [2024 年 10 月 16 日確認].

5—②13:40～14:15【懇談発表 2】

語りの進行を指向した順番交代：語りにおける受け手による順番取得

臼田 泰如（静岡理科大学）

本研究では、自然会話における語りの最中に生じる順番交代について、多くみられるパターン、それらがもたらしている相互行為的帰結について議論する。「語り」はひとまとまりの出来事などについて、基本的に一人の語り手が継続的に順番を保持して発話するふるまいである(Jefferson 1978)。しかし実際のやりとりでは、語りの進行中に受け手が順番を取得する事態がしばしば観察される。本研究における事例

では、受け手が「聞いていることの表示」ではない順番取得を行うパターンとして、修復と引き取りが繰り返し見られた。これらの連鎖においては、受け手は語りを行う立場になることはなく、語りがそこで終了することもない。こうしたことから、受け手は語りの進行を指向し、その継続を受け手も支持するふるまいを行っているといえる。

参考文献：Jefferson, G. 1978. “Sequential Aspects of Story Telling in Conversation.” In J. Schenkein (Ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press. 213–248.

ポスター発表 (14:20~15:20)

会場：リサーチ commons

会場担当：ツォイ・エカテリーナ

①上級日本語学習者が持つ文末モダリティ表現「シヨウカ」の潜在的イメージ —TAE (Thinking at the Edge) を用いて—

大政 美南 (東京学芸大学[院] <横浜国立大学配置>)

本発表では、上級日本語学習者が提案、勧誘、申し出などの機能を持つ文末モダリティ表現「ましようか／しようか」(シヨウカ) に対してどのような潜在的イメージ持っているのかを解明することを試みた。それにより、学習者の表現選択に関わる要因に迫れると考える。具体的には、Watts (1992, 2003, 2005)、Eelen (2001) が重視する一般の話者の認識に迫るために、6 名に対する半構造化インタビューデータを TAE (Thinking At the Edge) で分析した。その結果、学習者はシヨウカに対して「選択肢を与える」「与えない」という相反する 2 つのイメージを持っていることが分かった。また、ポライトネスの観点で見ると、シヨウカは近接化 (滝浦 2005, 2008) の表現であるため、ポジティブ・ポライトネスとして認識されていることが明らかになった。その一方で、近接化の結果、インポライトネスになる可能性も認識しており、その場合は使用を避けていることも分かった。

参考文献：(1) 大政美南. 2023. 日本語母語話者の Politeness1 の観点から見た「シヨウカ」の表現選択要因 —近接化と遠隔化が伝えるイン／ポライトネス—、語用論研究、25、81-105. (2) 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』、東京：研究者. (3) 得丸さと子. 2010. 『ステップ式質的研究法—TAE の理論と応用—』、東京：海鳴社.

②インタビューにおける共通基盤化プロセス：調査者・被調査者間の関係性に関する一考察

児島 麦穂 (三重大学)

本発表は、調査者と被調査者間のインタビュー内に発生した相互理解のプロセスに着目し、会話参加者たちがどのようなストラテジーを用いて共通基盤化に至っているのかを明らかにするものである。本発表では、20 代後半の女性である被調査者が配偶者の両親に関するエピソードを語る場面をデータとして扱う。分析の結果、調査者は被調査者と共有する「日本の伝統的な家族」のイメージといった「核となる共通基盤」(Kecskés and Zhang, 2009)や、友人として保持している共有の経験に基づいて質問を行ない、インタビュー場面において被調査者と「創発的共通基盤」を構築していた。これにより、被調査者らの個人的な経験や彼女たちが持つ意見を聞き取ることを目的とする調査において、調査者の質問方法や、調査者が被調査者と友好関係を築くことの重要性について議論する。

参考文献：(1) Kecskés, I. and Zhang F. 2009. “Activating, Seeking, and Creating Common Ground: A Socio-cognitive Approach.” *Pragmatics and Cognition* 17 (2), 331-355.

③日本人英語学習者の語用論的能力および相互行為能力の一端と教育的示唆：依頼と対話の流れに着目して

三浦 愛香 (立教大学)・並木 一美 (立教大学)

本研究では、日本人英語学習者の語用論的能力および相互行為能力の指導を念頭に置き、対話者同士の相互関係を捉えて依頼の発話行為とその前後に見られる対話の流れを質的に分析した。インタビューテストを書き起こした The NICT JLE Corpus より、中上級レベルの学習者と試験官の買い物の交渉タスクの対話を 2 件観察した結果、学習者は、「ストーリー・テリング」(Wong and Waring, 2021) により交渉を有利に進めることに成功し、ターンテイキングにおいても相手の発話を承認しつつ対話を共同構築する「間

主観性 (intersubjectivity)」(Roever, 2022) を実現した相互行為能力が観察された。しかし、同じ定型表現の依頼を繰り返す「柔軟さの欠如」(Roever, 2022)や、試験官に対して感情的かつ直接的な物言いの傾向も観察され、語用言語および社会語用論的能力の指導の余地が示唆された。

参考文献：(1) Roever, C. 2022. *Teaching and Testing Second Language Pragmatics and Interaction: A Practical Guide*. New York: Routledge. (2) Wong, J. & Waring, H. Z. 2021. *Conversation Analysis and Second Language Pedagogy: A Guide for ESL/EFL Teachers*. New York: Routledge.

④現代歌壇の従属節におけるテンスの解釈とレジスター化—何がリアルな表現かを巡る「道行き文体」の発見を例に—

重久 理奈 (大阪大学[院])

一人称詩を標榜する短歌では、一首の視点を発話時に統一するものとされてきた。本発表の目的は、こうした文化志向的な枠組みに基づき文体が解釈される、(メタ) 語用論的過程の解明にある。そこで文体形成を、ある言語特徴が使用者間で一定の印象を指標すると解される「レジスター化」(Agha, 2007)と見なし、写実の方便であった視点集約の理念が規範となって歌壇の成員に時制表現の実態を歪めて報告させる様を、典型から逸脱した事例への反応から探った。例えば、発話時でなく事態時に視点を置く相対テンスが散見される森岡貞香(1916-2009)作品には、従属節の非過去形に文法的説明と整合しない臨場感を見出す歌評が複数寄せられている。この語りに追従する視点という理解は、時の助動詞を交え回顧を明示する選好に反した、非過去形選択の合理化と捉えられる。森岡作品が視点の推移から「道行き」(今井, 2008)と名指される一因は、時制の選択原理への歌人らの曲解にもあると言える。

参考文献：(1) Agha, A. 2007. *Language and Social Relations*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) 今井 恵子. 2008[2002]. 「短歌と文体」、『今井恵子歌集』128-137、東京都: 砂子屋書房.

⑤相互行為を中断させる発話と謝罪表現: 「ちょっと待って」と謝罪表現を中心に

梁 勝奎 (名古屋大学[院])

会話や共同作業などの特定の活動を進めている際、他の参加者が様々な理由でその活動を中断または遅延させることがある。本研究では、「ちょっと待って」という発話形式と謝罪表現を組み合わせる活動を中断・遅延させる現象に注目し、特にその中で謝罪表現がどのような相互行為をしているかを会話分析の手法で分析する。「ちょっと待って」は、相手の進めている活動に同調するため準備を整える場合と、相手が進めている活動とは独立した別の活動を進める場合に使われていた。この二つの場合の中で謝罪表現が伴われるのは後者の独立した活動の場合に限られていた。謝罪表現は活動を中断させることに対する権限の有無を示しつつ、中断することに対する責任の所在がどこにあるかを示すことができる。さらに、謝罪表現の使用は自分が行っている別の活動を終えるまでの十分な時間を確保するための手段として用いられていると考えられる。

⑥不定用法 you の由来 — 第一言語習得からの考察

都築 雅子 (中京大学)

総称代名詞 we, they, you (you は単・複の2種類) の中で、不定用法の you (単数用法/例 *You never can tell what will happen.*) のみが一般化を述べる表現に限られるという特性を有する(総称代名詞の分類は Kitagawa and Lehrer (1990)を参照)。不定用法の you の特性である「分布の限定性」に関して、本発表で提示する第一言語習得過程における you の指示拡張の仮説を仮定しなければ導出されないことを示したい。指示拡張において、「You 主語構文 (例 *You should work harder. / You can't touch the kettle.*)」が拡張の鍵になると論じる。「You 主語構文」は以下の3点を満たすものとして定義される。①you を主語とする義務用法の(疑似)法助動詞文あるいは命令文、②聴者に対する行動指示(命令・禁止・指示・助言・許可など)を表す、③幼児に規範(prescriptive norm)のみならず descriptive norm も含む)を伝える場面で養育者が使用する。仮説の検証のために、Orvell et al. (2018)の習得実験などの先行研究のほか、CHILDESからのデータを参照したい。

参考文献: (1) Kitagawa C. & A. Lehrer. 1990. "Impersonal Uses of Personal Pronouns." *Journal of Pragmatics* 14, 739-759. (2) Orvell, A. et al. 2018. "That's how you do it: Generic you expresses norms during early childhood." *Journal of Experimental Child Psychology* 165, 183-195. (3) Sorlin, S. 2022. *The Stylistics of 'You': Second-Person Pronoun and its Pragmatic Effects*, Cambridge.

⑦SNS コミュニケーションにおけるアイロニー：Elon Musk の事例分析

河見 竜摩 (徳島大学[院])

伝統的にアイロニー研究の考慮する要素として話し手、聞き手の2者間で交わされる会話が、研究対象とされてきた(Grice,1975 など)が、現代では SNS でのコミュニケーションが発達した。そこで本研究では SNS におけるアイロニーを分析することでこれまでの分析を再考することができる。またアイロニーであると明示することでその効果が失われる(Grice,1989)とされていたが、アイロニーであると伝えることでアイロニーを伝える表現が散見された。本研究は SNS でのアイロニー表現、特に「この状況はアイロニーということで、アイロニーを人に伝える」表現を分析することで、明示されたアイロニーが伝わる構造を分析する。Elon Musk がアイロニーと明示したポストに注目し、どのようにしてアイロニーとして伝わるのか、その構造を理解することを目指す。現代の SNS コミュニケーションにおけるアイロニー理解を深め、既存のアイロニー研究にも新たな視点を提供することを目指す。

参考文献：(1) Grice, P. 1975 *Logic and Conversation* (Syntax and Semantics 3: Speech Acts, pp.41-58. (1975)). Academic Press Inc. (2) Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Harvard College Press. (3) Lucariello, J. 1994. "Situational irony: A concept of events gone awry." *Journal of Experimental Psychology: General*, 123(2), 129-145.

会員総会 (General Meeting of Members) (15:30~15:50)

会場：Room1 (文 41 大講義室)

会員の方はご参加ください。

議題：新役員・評議員について 他

大会発表賞表彰式 (Best Presentation Award Ceremony)

(15:50~16:10)

会場：Room1 (文 41 大講義室)

【基調講演 (Plenary Lecture)】(16:15~17:45)

＜オンラインによる同時配信有＞

会場：Room1 (文 41 大講義室)

司会：秦 かおり (大阪大学) / 司会補佐：臼田 泰如

翻訳話体と小説：村上春樹作品を例に

金水 敏 (放送大学大阪学習センター所長・大阪大学名誉教授)

中村桃子 (2013) では、翻訳・吹き替えにおいて女性は「女ことば」、男性は「翻訳版・気さくな男ことば」を用いるとし、後者は「やあ／さ／かい／だい」という指標によって特徴付けられるとしたが、これらの特徴は村上春樹の小説作品に広く見られるところで、村上春樹は日本語の小説に翻訳話体を大胆に持ち込んだ最初の作家として位置付けられる。今回はこの特徴に加え、「言いさし+ネ」構文を取り上げたい。これは「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」(『風の歌を聴け』冒頭) のように、言いさし文にネを付けて、先行する文との関係を表示する構文であり、英文翻訳に広く見られるものである。本講演では、助詞「ね」の談話的機能の考察と併せて、村上春樹の小説に見られる「言いさし+ネ」構文の起源と機能について考える。

【講師略歴】

金水 敏 (きんすい さとし)

1956 年 4 月 29 日大阪生。放送大学大阪学習センター所長。神戸大学教養部、大阪女子大学文芸学部、神戸大学文学部等を経て、2022 年 3 月に大阪大学大学院文学研究科教授を退職、同 4 月より現職。2020 年 12 月に日本学士院会員。2023 年文化功労者。

主な著書に『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店、2003/2023)、『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』(岩波書店、2014/2023)、『日本語存在表現の歴史』(ひつじ書房、2006)、『〈役割語〉小辞典』(編著、研究社、2011) 等。趣味はフルート演奏、文楽、落語、宝塚歌劇等の鑑賞など。

【懇親会 (Reception)】(18:00~)

会場：豊中福利会館 4 階

〔懇親会会場周辺マップ〕



12月1日(日)

□頭発表 (9:00~10:55)

会場: Room1 (文 41 大講義室)

1-①②③司会: 西田 光一 (山口県立大学)

司会補佐: ツオイ・エカテリーナ

1-①9:00~9:35

行為指示を意図した条件文の後件に生起する「ことにする」・「ことになる」の語用論的機能について

森 貞 (福井工業高等専門学校)

話者は、[1]の条件文を用いて、聞き手に対して、前件に示される行為の実行を間接的に指示することができる。[1]「授業に教科書を持ってこなかったら、減点 {するよ / することにするよ / することになるよ}。」〈直接的行為指示表現は「教科書を持ってきなさい」〉。赤塚 (1998)では、上記の発話行為 (の遂行) には「Desirability の原理」が関わっているとされる。本発表では、上記原理を援用して、当該条件文の後件 (特に、後件 = 〈話者の行為〉) に生起する「ことにする」・「ことになる」はそれぞれ、【恩着せ (後件 DESIRABLE) / ダメ押し (後件 UNDESIRABLE)】機能・【〈リスク回避〉・〈責任回避〉のために予防線を張る】機能を有していることを主張する。また、[2]に示す「ことになる」に前接するル形・タ形はそれぞれ《可能性》・《確実性》の伝達により行為の実行を促していることを主張する。[2]「事実じゃないのなら、ちゃんと指摘しないと、(君はそれを) {認めル / 認めタ} ことになるよ。」

参考文献: (1) 赤塚紀子. 1998. 「条件文と Desirability の仮説」. 『日英語比較選書 3 モダリティと発話行為』. 東京. (2) 佐藤琢三. 2000. 「ナルの文の発話と対人行為」. 『現代日本語の語彙・文法』. 東京.

1-②9:40~10:15

現代日本語における文末表現「V ヨウニ」が表す「命令」と「祈願」

白石 暖哉 (京都大学[院])

本研究の目的は、文末表現「V ヨウニ」が祈願の意味において V に「マス」を愛好することを定量的に検証し、語用論的観点から説明を与えることである。従来「マス」は「合格しますように」といった祈願の意味では義務的であり、「躊躇せず病院に行くように」といった命令の意味では任意だとされていた (前田 2006)。しかし、実際の用例には祈願の意味で「マス」が生起しないものや、「マス」が生起するが命令を表すものも存在する。そこで本研究では BCCWJ から抽出した文末表現「V ヨウニ」の用例を祈願または命令に分類し、コロストラクション分析によって「マス」との誘引度を比較する。この誘引度の相違について、本研究ではポライトネスの観点から考察し、従属節が主節化し特定の語用論的機能を帯びる insubordination (Evans 2007) の一種として「V ヨウニ」を位置づける。

参考文献: (1) 前田直子. 2006. 『「ように」の意味・用法』東京: 笠間書店. (2) Evans, N. 2007. "Insubordination and its Uses." In I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366-431. Oxford: Oxford University Press.

1-③10:20~10:55

「匂いがする」型の知覚表現と情報構造

大西 美穂 (名古屋短期大学)

日本語の知覚表現において、文構造に「ゆれ」が観察されるケースを取り上げ、視点や情報構造の点から考察する。動詞「する」を用いる知覚・感覚表現は、いわゆる「青い目をしている」型と、本研究で「匂いがする」型と呼ぶ2種類の構造がよく知られる。いずれも知覚の結果としての「目」の青さや「匂い」の情報を、その情報への評価を含めて表現するという共通点がある一方、いずれの構造を用いるかは感覚様式による。基本的には、視覚情報は「青い目をしている」型で、嗅覚、味覚、聴覚を中心とした視覚以外の知覚・感覚情報は「匂いがする」型で表現する。しかし、出現数は少ないが、「匂いがする」型を選択することが予測される視覚以外の情報が「青い目をしている」型で表現される事例が散見され、文法性に問題はないと判断される。本研究は、この有標構造が、視点を調整したり情報構造を成立させたりするための臨時の手立てであることを論じる。

参考文献：(1) Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge University Press. (2) Viberg, Åke. 1984. "The verbs of perception: a typological study". In *Explanations for Language Universals*. eds; Brian Butterworth, Bernard Comrie and Östen Dahl, De Gruyter Mouton, pp. 123-162.

□頭発表 (9:00～10:55)

会場：Room2 (第 42 講義室)

2-①②③司会：横森 大輔 (京都大学)

司会補佐：大江 元貴

2-①9:00～9:35

共有知識の有無によるコミュニケーション調整：留学経験者・留学未経験者に対する留学経験者の語りについての一考察

稲葉 皐 (大阪大学[院])

本発表では、Zoom で行われた留学経験者同士の会話と、留学経験者と留学未経験者との会話をデータとし、参与者間の共通基盤の有無が鍵となり、話し手の言語・非言語行動、語りの内容や語り方が調整されることを明らかにする。留学経験者同士の会話では、留学先での経験を語る際に、同じような経験を共有しているからこそ、「その場にいた者同士」で共有している状況・環境を説明せずに、語り手が登場人物の代わりにその視点 (character-viewpoint: C-VPT) で行うジェスチャー (McNeill 1992) によって当時の状況が再現され、共感的な相槌が生まれていた。一方で、留学という共有知識の少ない聞き手である留学未経験者に対し、留学経験者は過去の留学経験とそれを補完する留学先の情報という複層的な語りを言い換えや引用の形で埋め込みながら共通基盤を構築していたことが明らかになった。

参考文献：(1) 秦かおり. 2020. 「結び直される広島記憶-テレビドキュメンタリーにおける被爆2世・3世のナラティブ分析」 秦かおり・佐藤彰・岡本能里子 (編) 『メディアとことば5』, 144-168, ひつじ書房. (2) McNeill, D. 1992. *Hand and Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

2-②9:40～10:15

それお前の感想やないかい！ —非関西方言話者の関西方言を用いた「ツッコミ的発話」の社会言語学的分析—

野村 涼 (スタンフォード大学[院])

関西出身の芸人のメディア露出により、関西方言を耳にする機会が増えている。さらにお笑いの文脈外において、非関西方言話者が関西方言を借用し「何でやねん」のようなツッコミ的発話する場面も散見される。先行研究においては、ツッコミはボケとの関係から定義・分析されるが、日常会話ではその機能を果たさず、異なる社会言語学・語用論的效果を生む。本研究は、お笑いのコンテキスト外における非関西方言話者の関西方言を用いた「ツッコミ的発話」を社会言語学・談話分析で使用される概念から説明する。関西弁を使ったツッコミ的発話が否定的評価の際に使われることで、お笑いのフレーム (Goffman, 1981) を喚起し、お笑い芸人の声 (c.f., Double-voicing, Bakhtin, 1981) を通して評価のカジュアルさや親しみを伝える効果が生じる。結果として、ネガティブ・フェイスの脅威が和らぎ、かつお笑いに関わる知識の共有からポジティブ・フェイスにも働きかける機能があると主張する。

参照文献：(1) Bakhtin, M. M. 1981. "Discourse in the Novel." In M. Holquist (ed.) *The Dialogic Imagination: Four Essays*, 259-423. Austin: University of Texas Press. (2) Goffman, E. 1984 [1974]. *Frame Analysis*. Boston: Northeastern University Press.

2-③10:20～10:55

聞き手を明示することが持つ二者間の会話の中での役割 —聞き手を呼称する語を含む発話の語用論的分析から—

長田 梨菜 (早稲田大学[院])

本研究の目的は、聞き手を明示することが二者間の会話においてどのような役割を持つのかを明らかにすることである。聞き手を明示することが持つ会話の中での役割については、対称詞や成員カテゴリーの観点から分析がなされている (田窪, 1997; Sacks, 1972 等)。対して、「(人名) さん」などの聞き手を呼称する語は、日本語の場合、二人称が主格名詞となる場合に用いられる (野田, 1996) にも関わらず、

その会話の中での役割については、十分な知見が得られていないと考える。このような語を含む発話は、発話の宛先を明示する必然性の低い二者間の会話でも用いられ、特に、本研究の分析では、褒めや励ましを行う会話に現れた。本発表では、このような会話の分析を踏まえ、聞き手を明示することは、聞き手以外の人物の存在を前景化させ、聞き手を相対的に捉えることにつながるということを主張し、それが聞き手を評価するための根拠の一つとなり得ることを示す。

参考文献：(1) 田窪行則. 1997. 「日本語の人称表現」、田窪行則 (編)『視点と言語行動』、13-44、東京：くろしお出版。(2) Sacks, Harvey. 1972. “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology.” In David N. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction*, 31-74, New York: Free Press.

口頭発表 (9:00~10:55)

会場：Room3 (第 22 講義室)

3—①②③司会：滝浦 真人 (放送大学)

司会補佐：大江 元貴

3—①9:00~9:35

語用論研究を活かした外国人ホテルスタッフのための JSP 日本語教育-断り談話の意味公式を用いて-
林 千賀 (城西国際大学)・中井 延美 (明海大学)

本発表は、語用論的知見を日本語教育、特に JSP(目的別日本語)教育に応用した研究活動である。宿泊業に就く外国人スタッフが効果的に習得できる接客日本語を検討し、観光現場で必要とされる外国人人材のための JSP 教育に貢献することを目指す。

1. 外国人学習者が日本語を用いて質の高いホスピタリティ(心のこもったおもてなし)を提供できるようになることを支援する接客日本語教育で取り入れるべき点は何か。
2. 接客日本語教育において客に対する気遣いや配慮が「ことば化」される仕組みをどのように可視化して提示することが有効であるのか。

本研究では、1 と 2 の問いの答えを探るために、対人関係修復行為を伴う「断り」行為に着目して、接客場面における外国人ホテルスタッフの対応を調査し、意味機能の単位である意味公式の観点から分析する。その結果を、さらに、母語話者である日本人ホテルスタッフの分析を行なった林(2024)の結果と比較し、1 と 2 を検討する。

参考文献：(1) 林千賀. 2024. 「客の依頼に対するホテルスタッフの断り談話の分析-断り行動と接遇対応の意味公式に注目して-」『城西国際大学紀要』32(2)、23-44. 城西国際大学。(2) 藤森弘子. 1994. 「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー-『断り』行為の場合-」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1、1-19. 名古屋学院大学。

3—②9:40~10:15

中国人日本語学習者の「断り」場面におけるフィラーの使用と機能について -日本語母語話者との比較を通して-

牟 玲 (名古屋大学[院])

「断り」行為は相手のフェイスを脅かす典型的な行為である(藤森 1994)。「断り」の場面では、フィラーが挿入されることが多く、相手のフェイスへの侵害を和らげ、丁寧さを示すうえで重要な役割を果たしていると考えられる。本研究では、「断り」の場面における中国人日本語学習者のフィラー使用に焦点を当て、「誘い」に対する「断り」のロールプレイデータをもとに、その使用状況と機能について分析・考察した。また、日本語母語話者との比較を通じて、両者の違いと共通点を明らかにした。その結果、フィラーの使用状況に関しては、中国人日本語学習者は「あの (一)」や「えっと」を多く使用する一方で、日本語母語話者は「なんか」や「あの (一)」を多く使用する傾向が見られた。フィラーの機能に関しては、中国人日本語学習者が「言葉探し」を多用するのに対し、日本語母語話者は「情報の曖昧化」や「和らげ」を多く使用していることが見られた。

参考文献：(1) 藤森弘子. 1994. 「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー-『断り』行為の場合-」、『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1、1-19。(2) 山根智恵. 2002. 『日本語の談話におけるフィラー』東京：くろしお出版。

3—③10:20~10:55

「大丈夫です」の意味構造をめぐって

中井 延美 (明海大学)

「レジ係 (留学生): レジ袋、お使いになりますか / 客 (日本人): 大丈夫です」のように使用される「大丈夫です」について、レジ袋が要るのか要らないのか非常に紛らわしい、という声が留学生からよく聞こえてくる。初級語彙であるにもかかわらず、日本の大学で学んでいる留学生のような上級学習者であっても「大丈夫です」をわかりづらいと感じるのはなぜだろうか。「表現が曖昧であるということと、表現に対する解釈が一つに定まらないということを混同すべきではない」という今井・西山 (2012: 91) の立場に基づく、「大丈夫です」は、曖昧であるといえる。本研究は、「大丈夫です」を取り上げ、尾崎 (2016) 他の先行研究、及び英語表現との対応を勘案しながら、例文を用いて意味的な曖昧性を検討する。その結果をもとに、「大丈夫です」のわかりづらさの仕組みを可視化し、日本語教育の学習コンテンツとして効果的に取り入れていく方法を提案する。

参考文献: (1) 今井・西山. 2012. 『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』。(2) 尾崎. 2016. 「「大丈夫です」の用法拡大に関する研究—不利益を想定して気遣う言語行動」。

□頭発表 (9:00~10:15)

会場: Room4 (文 11 講義室)

4—①②司会: 澤田 治 (神戸大学)

司会補佐: 堀内 ふみ野

4—①9:00~9:35

The Lexicon-Encyclopedia Debate: A View from Anti-Lexicalism

MAEDA, Kotaro (Kobe Gakuin University)

This talk discusses the interface between semantics and pragmatics from the anti-lexicalist perspective embodied by Distributed Morphology (henceforth, DM), a generative linguistics framework. While a lexicalist framework assumes that lexical meaning is stored in a ‘pre’-syntactic lexicon, DM holds that lexical meaning is constructed by syntax. After, it is interpreted with the input from a lexicon called Encyclopedia. This paper aims to flesh out the process by which Encyclopedia is used. While delimiting “encyclopedic” meaning, I argue that the Encyclopedia’s role provides a logical form with “encyclopedic” meaning. This DM-based argument lends itself to Relevance Theory, which presumes that logical forms are pragmatically fleshed out to create explicatures. The additional layer of meaning from the Encyclopedia is necessary for building explicatures. To illustrate this argument, I demonstrate that ‘change-of-location’ interpretation of manner-of-motion verbs in English, under certain syntactic circumstances, belongs not to the semantic side but to the pragmatic side.

References: (1) Carston, R. 2008. “Linguistic Communication and the Semantics/Pragmatics Distinction.” *Synthese*. (2) Harley, H. and Noyer, R. 2000. “Formal versus Encyclopedic Properties of Vocabulary: Evidence from nominalization.” *The Lexicon-Encyclopedia Interface*.

4—②9:40~10:15

Hurford’s Constraint and Japanese disjunctive ka and matawa

TATENO, Kanta (Osaka University [GS])

In this presentation, I examine the distinction between the Japanese disjunctions “ka” and “matawa” in relation to Hurford’s Constraint (Hurford 1974, Chierchia et al. 2009). According to this constraint, a disjunctive sentence is infelicitous if one disjunct entails the other. However, exceptions, such as those outlined in Gazdar’s Generalization (Gazdar 1979), demonstrate that infelicity can be avoided when the implicatures of the disjuncts are in conflict. I argue that ka and matawa exhibit different behaviors in terms of their compatibility with local scalar implicatures. For instance, in disjunctions involving scalar terms like some or all, matawa adheres to Hurford’s Constraint, while ka does not support embedded implicatures. I also present data across various contexts, that a null argument anteceded by a disjunctive phrase is included, seems to behave differently depending on whether ka or matawa is used.

References: (1) Chierchia, G. and Fox, D. and Spector, B. 2009. “Hurford’s Constraint and the Theory of Scalar Implicatures.” In *Proceedings of the MIT-paris workshop*. Cambridge: MITWPL. (2) Hurford, J. 1974. “Exclusive or Inclusive Disjunction.” *Foundations of Language* 11, 409–411.

□頭発表 (9:00~10:55)

会場：Room5 (文 13 講義室)

5-①②司会：椎名 美智 (法政大学)

司会補佐：堀内 ふみ野

5-①9:00~9:35

TIME 誌における分離不定詞の語用論的意義

福本 広光 (三重大学)

本研究は米国を代表する雑誌メディアの一つである TIME 誌に着目し、そこに表出する分離不定詞 (split infinitive) の使用意義を語用論的に検討することを目的としている。TIME Magazine Corpus のデータに基づき、1923 年から 2006 年にかけての出現頻度と文脈を調査した。分離不定詞は特に政治やエンターテインメントに関連したトピックにおいて読者の注意を引く役割や、特有のリズムを生み出して文の流れを強調する目的での使用が多く見られる。従って、分離不定詞は形式的に逸脱した表現とされながらも肝要なコミュニケーション手段として機能している可能性が高いことが確認された。分析では協調の原則などを援用し、当構造を用いることで「情報を伝達する際の読者による「読み」の能率化」を進め得るという点を軸に考察を行いつつ、本研究はミクロ語用論からの視座のみならず言語と社会文化の関連について論じるマクロ語用論からのアプローチも有効である点に言及する。

参考文献：(1) Firebaugh J.J. The vocabulary of “Time” magazine. *American Speech* 15. 232-242. (2) Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

5-②9:40~10:15

断り文句 not X or anything, but Y における or anything の機能

松山 加奈子 (奈良女子大学[院])

本研究では、not X (or anything), but Y という形式の断り文句に焦点をあて、or anything の働きを明らかにする。例えば、(1) I don't want to sound like your mother (or anything), but I think you should wait. という文では or anything が容認される一方で、(2) I am not sure (*or anything), but I think you should wait. には、or anything が容認されない。この容認度の分析を通じて、or anything の基本機能を確認し、容認される場合であっても、その使用文脈の違いを比較することで、or anything の語用論的機能を記述する。結果として、or anything は先行する語句を具体例として「カテゴリー形成を促す」という基本機能を果たし、語句をぼかすことで、発話を緩和し、相手への配慮を伝えていることが明らかになった。この研究は、or anything を含むジェネラルエクステンダー全般の解明に貢献すると同時に言語において配慮は重層的に示されることも示唆する。

参考文献：Overstreet, M. and G. Yule 2001. Formulaic Disclaimers. *Journal of Pragmatics* 33: 45--60.

5-③10:20~10:55

若者ことば「ぴえん」の文末指向性

工藤 俊 (駒沢女子大学)

本論は、若者ことば「ぴえん」の感嘆詞的用法に着目し、その談話的特徴を明らかにする。「ぴえん」は、発話内容に由来する深刻さを直後で緩和する語用論的機能を持つ。これは、当該表現が評価対象となる状況を前提として要求し、前提情報不在の文頭ではなく、情報が充足した文末でこそ、その特徴的な語用論的効果を発揮することを示唆している。実際、文末の当該表現を文頭に移した場合は非文となる。

(1)?* ぴえん。地元離れちゃったから寂しくて死にそう。

さらに、評価対象が不明な状況で、同情・非難といった態度を示すことはできない。

(2)A: ぴえん

B: *それはつらかったね。/*それは深刻だね。/*それはあなたが悪いよ。

これらを踏まえ、本論では以下の点を主張する。

(3)感動詞の用法「ぴえん」は、文末指向という談話的特徴を持つ。それは、直前の発話内容の深刻さを緩和し、対人関係を調整するという当該表現固有の語用論的特徴に起因する。(cf. 工藤 (2022,

2023))

参考文献：(1) Brown, P. and S. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Use*, Cambridge. (2) 工藤俊. 2022. 「マジ卍」と「ぴえん」に映る若者の心」、『ユリイカ』2022 年 8 月号、200–208、東京。
(3) 工藤俊. 2023. 「言語使用の三層モデルからみる「マジ卍」と「ぴえん」の語用論的機能」、『日本語用論学会第 25 回大会発表論文集第 18 号』、74–81.

【会長就任講演 (President Lecture)】(11:10~12:00)

＜オンラインによる同時配信有＞

会場：Room1 (文 41 大講義室)

司会：吉田 悦子 (滋賀県立大学) / 司会補佐：平川 裕己

語用論のコアとペリフェラル:語用論はどのように応用/援用されるのか

秦 かおり (日本語用論学会会長・大阪大学)

語用論という分野はとても特徴的である。演題の「コアとペリフェラル」とは、中心と周縁という意味であるが、語用論の場合、歴史的に「語用論である」と断言されてきたコアと、コアの周りで段々と特徴を薄くしていき周縁化されたものがある。「学際的」「融合」などとも言えるかも知れないし、「方法論だけ借りる」「分析の一部として拝借する」とも言えるだろう。

日本語用論学会のこれまでのプログラムを見ると、この「周縁的領域」への広がり、それを志向する会員が屋台骨を支えていると言えるように思える。そして、おそらく日本語用論学会を自分の中心的学会(コア学会)にしていない人も多く存在するように想像する。これはおそらく、語用論が 1 つの理論で形成されているわけではなく、他領域との交流と相互乗り入れが可能な分野であることが理由の 1 つだろう。

私は自分が研究していることはまさしく語用論における「周縁」であると考えている。会長は「コア」の人がなるべきではないかとの考えもあると思われるが、上記のように考えると、学会員の多くの人が別のコア学会を持っているであろうと予測できるのだから、その代表という意味ではできることがありそう。

今講演では、確固たる目的を常に遂行しながらも、あちこちの分野に所属し研究をしてきた者としての自分の変遷、そして日本語用論学会に流れ着いた適切な道筋を話し、語用論とは何かを私自身の体験に重ねて話したいと思う。

【^{サロン}語用論茶寮 (Pragmatics Salon) [Lunchtime Talk]】(12:10~12:50)

会場：Room2 (第 42 講義室)

研究会の作り方、育て方、楽しみ方

講師：高田 博行・佐藤 恵

(以上、HiSoPra* (歴史社会言語学・歴史語用論) 研究会)

西村 綾香・菊地 礼 (以上、デジタルコミュニケーション研究会)

司会：堀内 ふみ野

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room1 (文 41 大講義室)

6-①②司会：澤田 淳 (青山学院大学)

司会補佐：平川 裕己

6-①13:00~13:35

メトニミーにおけるソースとターゲットの照応可能性

富岡 侑央 (京都大学[院])

本研究はメトニミーが関わる先行詞に対する照応代名詞の振る舞いについて考察する。このような照応表現では先行詞となるメトニミーのソースが照応される場合とターゲットが照応される場合がある。この違いはしばしばメトニミーを分類する根拠として扱われる。しかしソースとターゲットの両方が照応可能なメトニミーが存在することや、照応表現の容認度が文脈の影響を大きく受けることから両者の違いは連続的であると考えられる。本研究ではこのようなメトニミーにおけるソースとターゲットの照応可能性を説明するために、特に参与性という特性が重要であることを主張する。これは当該要素が表現された事態、またはそれによって推論される事態に参与する度合いである。また、当該要素が語彙として現れているかという点 (明示性) や先行詞を含む文と照応代名詞を含む文の文脈の一貫性も照応表現の容認性に関わる要素であり、これらについても検討する。

参考文献：(1) Nunberg, G. 1995. Transfers of Meaning. *Journal of Semantics* 12(2). 109-132. (2) 山本幸一. 2010. 「メトニミーの下位区分：代名詞の照応現象の違いを通して」『日本認知言語学会論文集』10: 140-148.

6-②13:40~14:15

オノマトペの世界：経験と感覚運動的イメージ

黒川 尚彦 (大阪工業大学)・武内 道子 (神奈川大学[名])

本発表の目的は、話し手がオノマトペによって伝達しようとしていることは何か、使用による伝達上の認知効果は何かを、Sperber & Wilson (1986, 1995)で提案された関連性理論の枠組みで考察することである。オノマトペは言語的営みとしての saying の側面と、話し手が感じた感情や印象を聞き手と共有したいことを指し示す showing の側面があることを主張する。後者の側面において、オノマトペが聞き手の五感に訴える「感覚運動的イメージ」により伝達内容を膨らませることを明らかにする。

参考文献：(1) Sasamoto, Ryoko. 2019. *Onomatopoeia and Relevance: Communication of Impressions via Sound*. Palgrave Macmillan. (2) 田守育啓・ローレンス・スコウラップ. 1999. 『オノマトペ：形態と意味』・くろしお出版.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room2 (第 42 講義室)

7-①②司会：工藤 俊 (駒沢女子大学)

司会補佐：臼田 泰如

7-①13:00~13:35【懇談発表 3】

「ジェネリック」の新規的用法—ヘッジ表現の観点から—

松浦 光 (埼玉学園大学)

本発表では、「ジェネリック医薬品」から派生していった「ジェネリック家電」「ジェネリック二郎」「ジェネリック米津玄師」といった例をヘッジ表現(Lakoff 1972)の観点から考察する。これらの例では、「ジェネリック」が名詞の前に付きヘッジ表現として働き、本来の先発する製品・食べ物・人物を指すことはない。そして、効果・機能の「代替」や「模倣」、見た目の「類似」などの意味が連続的に生じている。また、英語の generic の「一般的な」という意味が希薄化している。意味変化のプロセスでは、新野 (2024)が提唱した「新語の分類」内の「事物・概念が以前からある場合」における「既存の語の新しい意味の発生」との共通点を見出すことができる。「ジェネリック」の新規的用法の動機づけには「ジェネリック医薬品」の「先発品と同程度の効果・機能である」、「先発品よりも安価である」という特徴が序列や優劣などの評価性とは異なる側面で関与することを論じる。

参考文献：(1) Lakoff, G. 1972. “Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts.” *CLS* 8:

183-228. (2) 新野直哉. 2024. 「新語の分類」、近代語学会（編）『近代語研究』24 集、251-269、東京：武蔵野書院。

7—②13:40～14:15

対話における「論点のすりかえ」についての語用論的考察

水田 洋子 (国際基督教大学)

対話の流れをそらす「論点のすりかえ」は、単純な対応では解決しない。語用論的な分析に基づいて、円滑に有意義な対話を進展させるための具体的な方法を議論する。

高橋他(2024) の具体例から、「論点のすりかえ」の話者は何らかの理由をつけて相手の発話を無効化する発話内行為をしていることが観察された。会話の含意、言語行為、ポライトネスの観点から、どのような要素がどのように関わっているかを分析し、「論点のすりかえ」に沿いつつ主体的に論点を「切り替える」方針を提案する。これにより、相手のフェイスを保って円滑に、かつ相手の知識や意見を生かして有意義な対話へと進展させ、更には相手との交流へと発展させる道が開かれることをシミュレーションする。本研究は、対話における論理的思考、多様な視点や情報の融合、および円滑な対人関係について、それぞれの質を高めて融合する方法についての議論の一部と位置づけられる。

参考文献：(1) Leech, G. 2014. *The Pragmatics of Politeness*. Oxford UP. (2) Huang, Y. 2015. *Pragmatics* (Second edition). Oxford UP. (3) 久野五郎 2019. 『矛盾、誤謬、詭弁、強弁、偽善、屁理屈』 東京図書出版. (4) 高橋昌一郎、山崎紗紀子 2024. 『ゼロからわかる論理的思考』(最新版) Newton 別冊 (株) ニュートンプレス.

□頭発表 (13:00～14:15)

会場：Room3 (第 22 講義室)

8—①②司会：遠藤 智子 (東京大学)
司会補佐：臼田 泰如

8—①13:00～13:35

語用論的観点からみた言語景観 - 防災・減災のための看板に着目して -

堀田 智子 (宮城学院女子大学)

近年、中長期在留外国人の増加に伴い社会の多様化が進む一方で、自然災害の頻発が深刻である。公共空間における「言語景観 (linguistic landscape)」は、情報提供に有用なツールである。従来の言語景観研究において、非日本語母語話者の視点や語用論的観点からの考察はロング (2014) を除き、十分に行われてこなかった。

本研究では、非日本語母語話者 20 名を対象にアンケート調査を実施し、防災・減災のための注意喚起表示に対する理解度と想定し得る避難行動についての認識を探究した。分析の結果、日本語習熟度を問わず、形式と機能の乖離が大きい掲示物は、発信者の意図の正確な理解が難しく、緊急時の避難行動に支障をきたす恐れがあることが明らかになった。

これらは、日本語教育や異文化コミュニケーション教育における防災教育の必要性を示唆するものである。

参考文献：ロング ダニエル. 2014. 「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題：日本語教育における「言語景観」の応用」、『人文学報』488、1-22.

8—②13:40～14:15

動感に基づく指導-学習を巡る言語と身体—太極拳教室における指導-学習過程のマルチモーダル分析—
名塩 征史 (広島大学)

本研究では、太極拳の指導-学習場面を対象とした相互行為論的アプローチによるマルチモーダル分析を通して、学習者の姿勢や動きを改善するために発話された独特の言語表現が、学習者の身体による動感(動きに伴う感覚)の探索によって理解可能になり、指導としての効果を発揮する仕組みを記述する。分析の対象となった太極拳教室では、太極拳のゆっくりとした滑らかな動きを支える安定した姿勢をいかに生み出し保持するか再三焦点が当てられていた。本発表では、この安定した姿勢を求めて指導者が頻繁に発話する「軸」、「重心」、「背中(を／に)もたれる」という表現、またこれらの発話を巡る指導

者／学習者の身体動作に注目した。これらの言語的・非言語的指導が、いかにして学習者の動きや動感と結びつき、学習者の実践を改善する指導として理解可能となるのか。目に見えず言い表し難い動感を巡るインタラクティブな指導-学習過程の記述を目指す。

参考文献：(1) 生田久美子・北村勝朗（編）. 2011.『わざ言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』東京：慶應義塾大学出版会. (2) 野村幸正. 1999.『臨床認知科学-個人的知識を超えて』大阪：関西大学出版部.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room4 (文 11 講義室)

9—①②司会：落合 哉人 (国立国語研究所)

司会補佐：大江 元貴

9—①13:00~13:35

メタファー標識としての括弧の使用傾向と修辭的機能について

丁 昊天 (名古屋大学[院])

本発表は、朝日新聞クロスサーチを用い、無作為に抽出されたクォーテーションマークあるいは鍵括弧（以下、総称として括弧と呼ぶ）を伴ったメタファー表現の慣習性と明示性（同じ文に目標領域を喚起させる言葉が配置されているか）を確認し、同じテキストにおける括弧なしメタファー表現との比較により、メタファー標識としての括弧の使用傾向と修辭的機能を分析するものである。具体的には、調査の結果をもとに、括弧が必ずしもある表現がメタファーであることの曖昧性を軽減させるために用いられるわけではないことを明らかにする。さらに、典型例についての検討を通じて、メタファー標識としての括弧はそれが置かれる文脈によって複雑な修辭的機能を担う場合があることを示す。

参考文献：(1) Goatly, Andrew. 1997. *The language of metaphors*. London and New York: Routledge. (2) 木村大治. 2011.『括弧の意味論』東京：NTT 出版. (3) Stefano Predelli. 2003. Scare Quotes and Their Relation to Other Semantic Issues. *Linguistics and Philosophy*, 26(1), pp. 1-28.

9—②13:40~14:15【懇懇発表 4】

丸括弧書きの語用論・文体論

大江 元貴 (青山学院大学)

本発表は、丸括弧書き「X (Y)」(例：「大阪大学(阪大)」「語用論(文脈との関わりの中で生じる意味を扱う分野)」)の多様な用法を体系的に整理した上で、丸括弧書きの使用と文体との関わりについて論じる。丸括弧書きの用法については黒田(2021)による認知言語学の視点からの優れた整理があるものの体系的性や網羅性に難点が残し、多様な用法の全体像を把握するのが困難であった。本発表では、丸括弧書きと同様に語句と語句を多様な関係で繋ぐコピュラ文「XはYだ」との対応関係などを指標にし、統語・語用論的視点から再整理した3種7類の体系的・網羅的分類を提案する。さらに各用法の現れ方がテキストジャンルによって大きく異なること、特に〈教科書〉に特異な使用があることを、コーパス調査を基に明らかにし、丸括弧のような“約物”がテキストジャンルの特性を捉える文体指標になりうることを示す。

参考文献：(1) 黒田一平. 2021.『文字と言語の創造性-六書からネットスラングまで-』. 京都：京都大学出版会. (2) 西山佑司. 2003.『日本語名詞句の意味論と語用論』. 東京：ひつじ書房.

【シンポジウム (Symposium)】(14:30～17:00)

＜オンラインによる同時配信有＞

会場：Room1 (文 41 大講義室)

言語コミュニケーションのなかの逸脱と創造性

司会：小松原 哲太 (神戸大学)

1. 趣旨

創造性にみちた言語表現は、規範や慣習から逸脱することがある。本シンポジウムでは、逸脱表現に注目することで独創的なアプローチを拓いてきた日本語学者 3 名を迎え、言語コミュニケーションの創造的側面を、「逸脱」という観点から論じる。2 部構成のうち、第 1 部は逸脱表現の実例を考察する実証篇、第 2 部は逸脱表現を研究する意義を問う理論篇である。精緻な文法分析を基盤として、逸脱表現研究の語用論的展開への道筋を探る。

2. 登壇者紹介

野田 春美 (神戸学院大学教授)：日本語の「のだ」やモダリティ表現・否定表現の研究、話しことばと書きことばの接点にかかわる研究と並行して、歌詞における逸脱的表現や、それ以外の“ゆれ”にかかわる表現の研究も続けている。

＜主要業績＞野田春美. 2021. 「J ポップの歌詞に見られる逸脱表現」、金澤裕之・川端元子・森篤嗣 (編) 『日本語の乱れか変化か—これまでの日本語、これからの日本語—』、69-87、東京：ひつじ書房。／野田春美. 2023. 「否定に関わる逸脱表現の考察—J ポップの歌詞を題材に—」、『人文学部紀要』43、77-87、神戸学院大学人文学部。

泉 大輔 (立教大学講師)：専門領域は日本語学・語彙論。日本語の逸脱的な表現である「文の包摂」を対象に、ウェブ上のテキストや会話データの実例に基づき記述的な研究を行っている。最近では他言語との対照も視野に入れて考察を進めている。

＜主要業績＞泉大輔. 2024 『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』東京：ひつじ書房。

天野 みどり (大妻女子大学教授)：現代日本語の格関係に関わる種々の構文を中心に研究。「参考文献がたくさんでいらっやいますね」など、言語運用の中で、逸脱的な特徴を持つ文が特定の構文をベースとした類推により理解されることを論じている。

＜主要業績＞天野みどり. 2002. 『文の理解と意味の創造』東京：笠間書院／天野みどり. 2011. 『構文の意味と類推拡張』東京：笠間書院／天野みどり. 2015. 「逸脱文の意味と推論—逸脱的な「のが」文の実例考察—」、加藤重広 (編) 『日本語語用論フォーラム 1』、101-121、東京：ひつじ書房。

3. 発表内容 (話題)

第 1 部：逸脱表現はなぜ生じ、どのように使われるのか？

第 1 発表	野田 春美	「歌詞における逸脱的表現の短縮志向」
第 2 発表	泉 大輔	「日本語の語構成における逸脱—「文の包摂」を対象に—」
第 3 発表	天野 みどり	「日本語構文の運用上における創造的逸脱—ノヲ文・ノガ文—」

第 1 部では、逸脱表現の実証的研究にもとづき、逸脱と創造性の実態を論じる。

第 1 発表の野田氏は、J ポップの歌詞に見られるさまざまな逸脱的表現を取り上げる。逸脱的表現の出現にはメロディなど歌詞特有の事情も関係しているが、「不要な言葉を省いて、表現を凝縮したい」という短縮志向が関係している逸脱的表現が多くあることを論じる。たとえば、「好きをあつめたら」という逸脱的表現の出現には、名詞とナ形容詞 (形容動詞) の類似性という要因があるが、短縮志向も関係しているといったことである。

第2発表の泉氏は、現代日本語におけるウェブ上のテキストや日常会話、広告表現で観察される逸脱的な言語現象「文の包摂」（振り込め詐欺、かまってちゃん、いいね！ボタン、幻のポケモンをもらおうキャンペーン、話しかけるなオーラなど）を取り上げる。種々の実例を使用文脈とともに提示し、その語構成上の特異性を示した上で、「文の包摂」が用いられる要因について一般的な複合語・派生語と比較しながら検討していく。

第3発表の天野氏は、文の形式と意味の結びつきが慣習化し構文としてパターン化すると、文の一部の形式が文法的に逸脱しても、類推により構文の意味が写像され解釈されることを論じる。このような場合、構文の意味とその逸脱的な形式の字義通りの意味とが重ねられ、むしろ意味情報は多くなる。逸脱形式が構文的知識により変容解釈されるタイプの、言語運用能力を基盤とした拡張的な言語表現を、創造的逸脱表現と呼び、逸脱的なノヲ文・ノガ文を例に考察する。

第2部：逸脱表現研究の言語学的な意義は何か？

第1発表	野田 春美	「逸脱的表現における短縮志向の一般性」
第2発表	泉 大輔	「逸脱的な造語法から広がる言語研究」
第3発表	天野 みどり	「創造的逸脱文研究の可能性」

第2部では、逸脱表現を研究することの理論的意義に焦点をおく。

第1発表の野田氏は、逸脱的表現の短縮志向は若者言葉における略語などとも共通性があり、歌詞のみの現象ではないことを論じる。一部は新語、新表現として定着する可能性もあり、言語変化にもかかわることを述べる。

第2発表の泉氏が扱う「文の包摂」は現代日本語に限らず古典語や他言語にも見られる。その逸脱性を考えるには言語学の諸分野の知見と併せて研究することが有用であり、当該現象に学際的な可能性があることを述べる。

第3発表の天野氏が論じる創造的逸脱の問題は、既に意味論でも取り上げられ、文法論に限らない。さらに、ジャンル、文体、書記言語・音声言語の違いなど、句や文を超えた研究領域にも関わり、新たな視点による考察の可能性があることを述べる。

閉会式 (Closing Ceremony) (17:00～17:10)

会場：Room1 (文41大講義室)

書籍展示 (Book Display and Sale) (11月30日・12月1日)

会場：4階ホール

以下の書店・出版社が本大会にご出展くださいます。どうぞ、お気軽にお立ち寄りくださいませ。

出展者一覧（五十音順：次頁からの企業広告もご覧ください）

- 大阪大学出版会
- 開拓社
- くろしお出版
- ひつじ書房

● 大阪大学出版会

※本広告掲載商品以外も対象になります

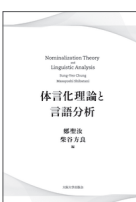
日本語用論学会大会会場にて特別販売 20%OFF



**現代中国語における
“是”とモダリティ**
中田聡美 著
本書では現代中国語で多用される“是”及び“是”によって構成される形式について、モダリティの観点から体系的に考察を行い“是”の本質を明らかにすることを試みる。
2024年刊・A5上製・272頁・5,720円【価格税込、以下同】



**日米社会と「多層的」少数者の
ディスコース分析** 一性的・民族的アイデンティティの「はざま」で—
木場安莉沙 著
日系人強制収容経験やクィアネスは、どのようにナラティブに取り入れられるのか。日米社会に生きる性的／民族的少数者の語りに表れるディスコースの交錯と、アイデンティティの構築を考察。
2023年刊・A5上製・206頁・4,510円



体言化理論と言語分析
鄭聖汝, 柴谷方良, 堂山英次郎 編 / 西岡美樹, Rajesh Kumar, Akua Campbell, Haowen Jiang, 田村幸誠, 米田信子, 鄭聖汝, 柴谷方良 著
認知言語学を含む機能主義言語学の新展開の具体例として新たな「体言化理論」を取り上げ、そこから導かれる成果を各種言語の再分析という形で示した画期的論文集。
2021年刊・A5上製・574頁・9,900円

外来語の基本語化 —現代新聞「叙述語彙」への進出—
金愛蘭 著
外来語の基本語化現象を大規模新聞コーパスに基づく計量的な調査と特定の外来語に注目した事例研究から考察する。
2024年刊・A5上製・310頁・5,720円

一歩進んだ日本語教育概論
—実践と研究のダイアローグ—
西口光一 監修 / 神吉宇一, 嶋津百代, 森本郁代, 山野上隆史, 義永美央子 編
実践と研究の両者を往還することで、日本語教育についての基本的な視点や姿勢を理解することを目指す入門的概説書。
2024年刊・A5並製・278頁・2,860円

出産・子育てのナラティブ分析 —日本人女性の声にみる生き方と社会の形—
【オンデマンド版】
秦かおり, 岡本多香子, 井出里咲子 著
統計に表れない当事者の想いを「語り」から分析。女性たちの意識、環境、立場を浮き彫りにし、社会に一石を投じる。
2019年刊・A5ペーパーバック・286頁・3,850円



大阪大学出版会
Osaka University Press
【ご連絡先】
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-7
TEL 06-6877-1614 Mail eigyo@osaka-up.or.jp

● 開拓社（下記の各書籍名をクリックし、HPにて詳細もご覧ください。）

日本語用論学会第27回大会 (大阪大学豊中キャンパス)

大会会場で、近刊・新刊はじめ多数展示します。ぜひお立ち寄りください。



動的語用論の構築へ向けて 第4巻
田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝 編 / A5判 272頁 定価4400円
●2025年1月発売予定



言語研究のためのPython活用術
浅尾仁彦 著 / A5判 216頁 定価3080円
●2025年1月発売予定

変わりゆくアメリカ英語 (上)(下) 方言と変異をめぐる12章 Walt Wolfram・Natalie Schilling 著 / 田村幸誠・住吉誠・南祐亮・中馬浩真・松浦幸祐 訳 / (上) 352頁・(下) 368頁 定価各5280円 極小主義における説明理論の挑戦 最適最小性が導く併合とコピー演算 石井透・後藤亘・小町将之・宗像孝 編 / A5判 368頁 定価5280円 エッセンシャル英文法 Otto Jespersen 著・中村捷 訳述 / A5判 432頁 定価5940円 「英文法用語大事典」シリーズ 第3巻 動詞と準動詞 【編集幹事】 縄田裕幸 / A5判 336頁 定価4180円	レキシコン研究の新視点 統語・語用と語の意味の関わり 岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 編 / A5判 356頁 定価5280円 構文理論 基礎から応用へ Martin Hilpert 著 / 大堀壽夫・貝森有祐・岩井恵利奈・山田彬亮 訳 / A5判 344頁 定価4620円 最新英語学・言語学シリーズ ■生成統語論の成果と課題 斎藤 衛 著 / A5判 264頁 定価4070円 ■文の構造と格付与 加賀信広・岸本秀樹 著 / A5判 232頁 定価3850円 ■生成文法と言語変化 縄田裕幸・柳 朋宏・田中智之 著 / A5判 300頁 定価4180円	McCawleyの統語分析 上野義雄 著 / A5判 384頁 定価5940円 百人一首の言語学 牧 秀樹 著 / A5判 224頁 定価2640円 開拓社 言語・文化選書 105 エンパシー制約と英語の相互動詞の用法 千葉修司 著 / 四六判 208頁 定価2420円 104 続・「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較 尾野治彦 著 / 四六判 216頁 定価2420円 103 コメディで学ぶ語用論の基本概念 平田一郎 著 / 四六判 240頁 定価2420円
---	--	--

〒112-0003 東京都文京区春日2-13-1 ☎03-6801-5651 <https://www.kaitakusha.co.jp> 定価は10%税込



開拓社

- くろしお出版（下記バナーをクリックし、会社 HP もご覧ください。）



くろしお出版

本学会に関連した多数の書籍を割引価格で販売します。
ぜひ弊社ブースにお立ち寄りください。
テキストご採用・出版企画のご相談なども歓迎です。

▼新刊・関連書

『場所格交替への認知言語学的アプローチ』（野中大輔）

『日本語会話における自慢・愚痴・自己卑下と共感についての研究』（釜田友里江）

『形態論の諸相』（乙黒亮/田川拓海）

『日本語の構造分析』（畠山雄二/本田謙介/田中江扶）

『言語政策研究への案内』（村岡英裕/上村圭介 編）

『はじめてのレポート作成トレーニング』（村上佳恵/李址遠）

『移民時代の日本語教育のために』（有田佳代子）

- ひつじ書房

新刊！

新しい認知言語学

言語の理想化からの脱却を目指して

渋谷良方・吉川正人・横森大輔編

定価 5,500 円+税

標準語や書き言葉のような「理想化された言語」を対象としたアプローチから脱却し、社会・相互行為の文脈から言語使用を考察する、新しい認知言語学の在り方を探求する。

談話標識へのアプローチ

研究分野・方法論・分析例

小野寺典子 著

定価 2,800 円+税

「談話標識（ディスコースマーカー）」は複数の分野で研究され、それゆえ混乱も起きている。主要な 3 アプローチと共時的／通時的分析ほかを解説、研究上の交通整理を試みた。

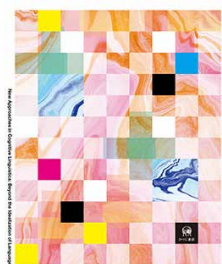


大会当日は文法経講義棟 4 階ホールにて出展しています。学会特別価格での販売です。ぜひお立ち寄りください。

↓ URL / 二次元コードからもご注文いただけます。

https://www.hituzi.co.jp/books/hituzi_psj2024fall.html

新しい認知言語学
言語の理想化からの脱却を目指して



談話標識
へのアプローチ

研究分野・方法論・
分析例

小野寺典子 著



■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信しております。
ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。

〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F
TEL 03-5319-4916 FAX 03-5319-4917
toiawase@hituzi.co.jp <https://www.hituzi.co.jp/>

ひつじ書房

大会総務委員会・委員長	竹田 らら（全体統括）
副委員長	大塚 生子，中馬 隼人（発表論文集担当）
委員	大志民 彩加，河野 亘，松浦 光，柳田 亮吾
大会企画委員会・委員長	小松原 哲太
副委員長	堀内 ふみ野
委員	臼田 泰如，大江 元貴，ツオイ・エカテリーナ，平川 裕己
大会発表委員会・委員長	早野 薫
副委員長	西田 光一
委員	五十嵐 海理，池 沙弥，杉本 巧
大会発表賞小委員会・委員長	遠藤 智子
第27回大会実行委員会・委員長	秦 かおり
副委員長	田村 幸誠
委員	榎本 剛土，木本 幸憲，小栗 哲哉，鈴木 大介，中嶋 浩貴，松浦 幸祐，山田 彬堯，Malik Luke

[illegible]